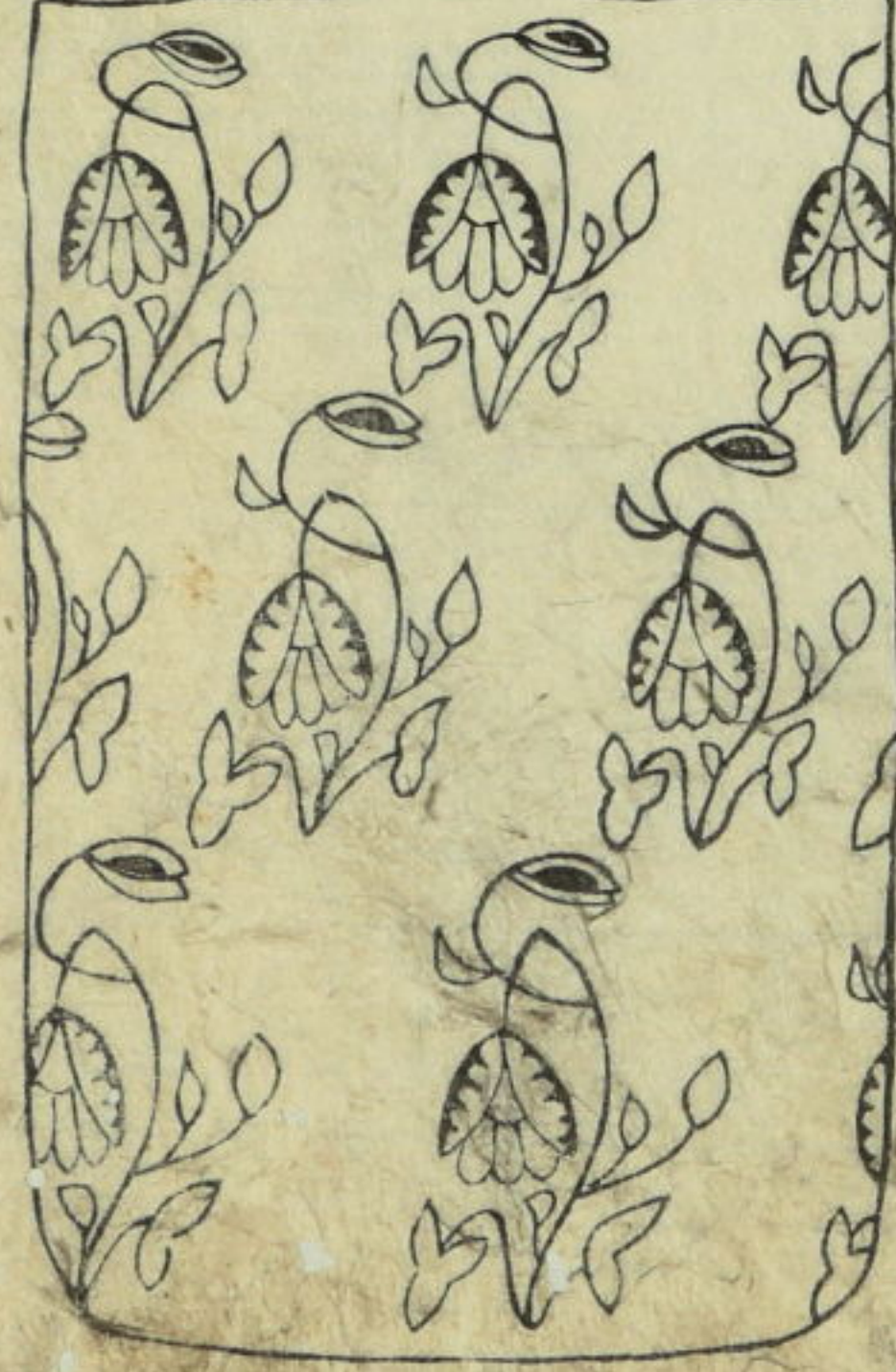
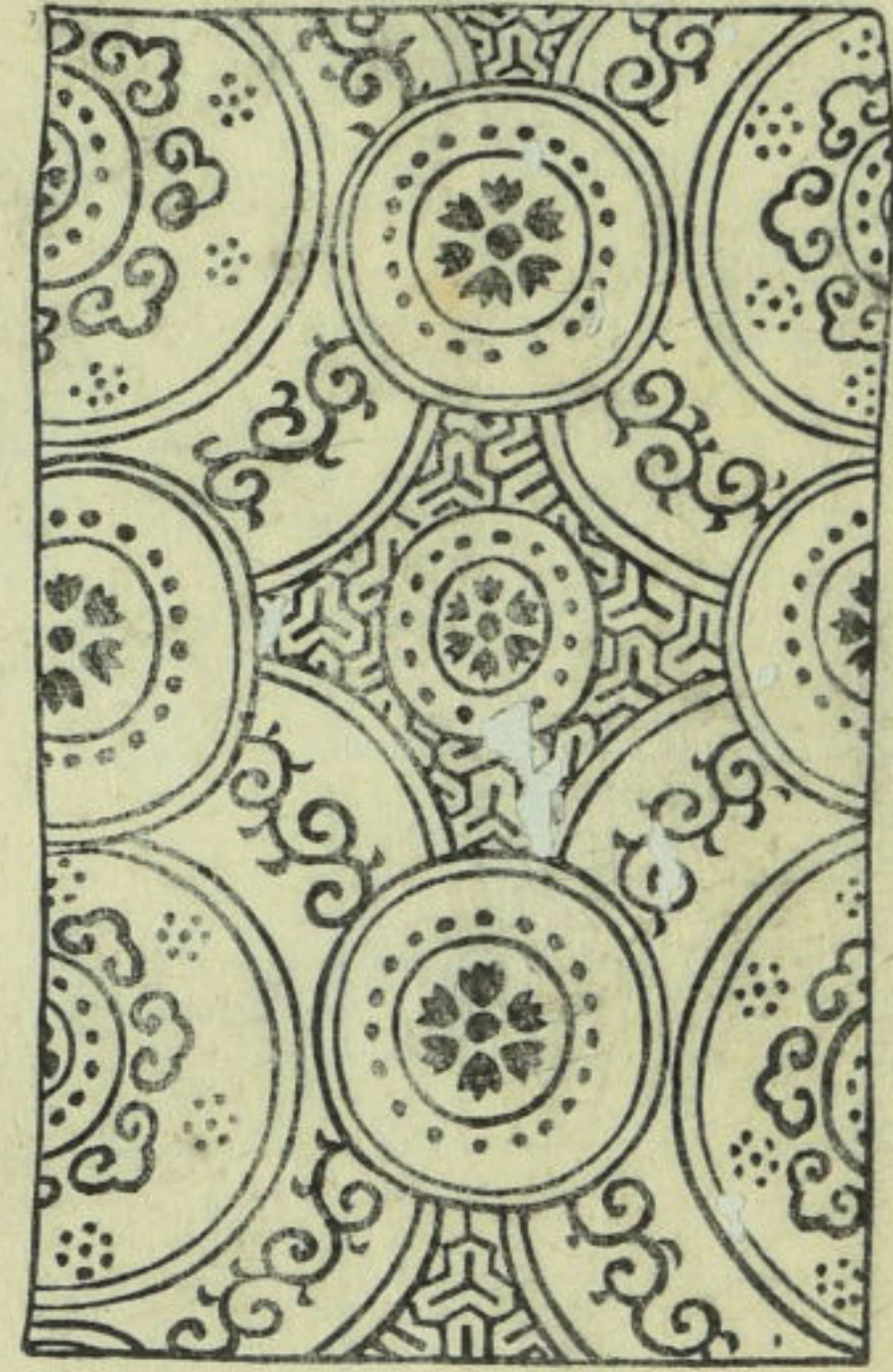
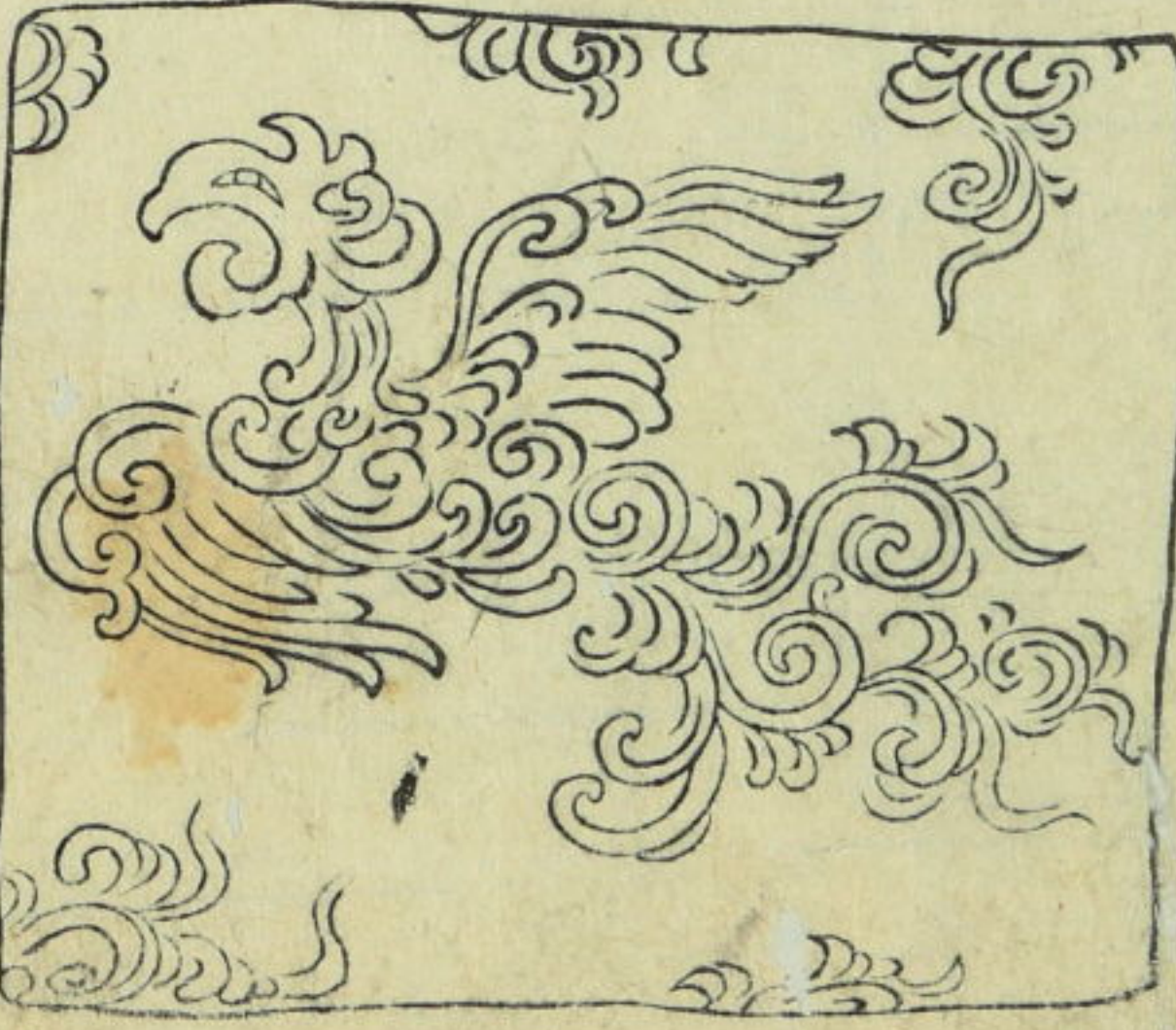
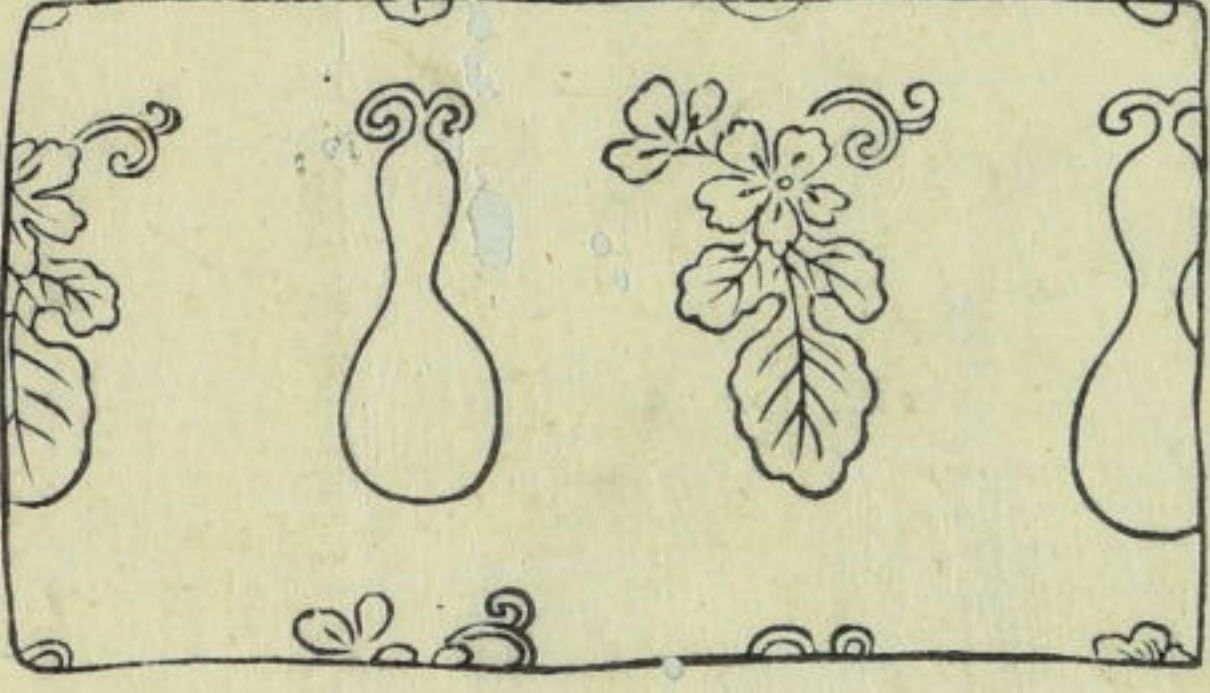


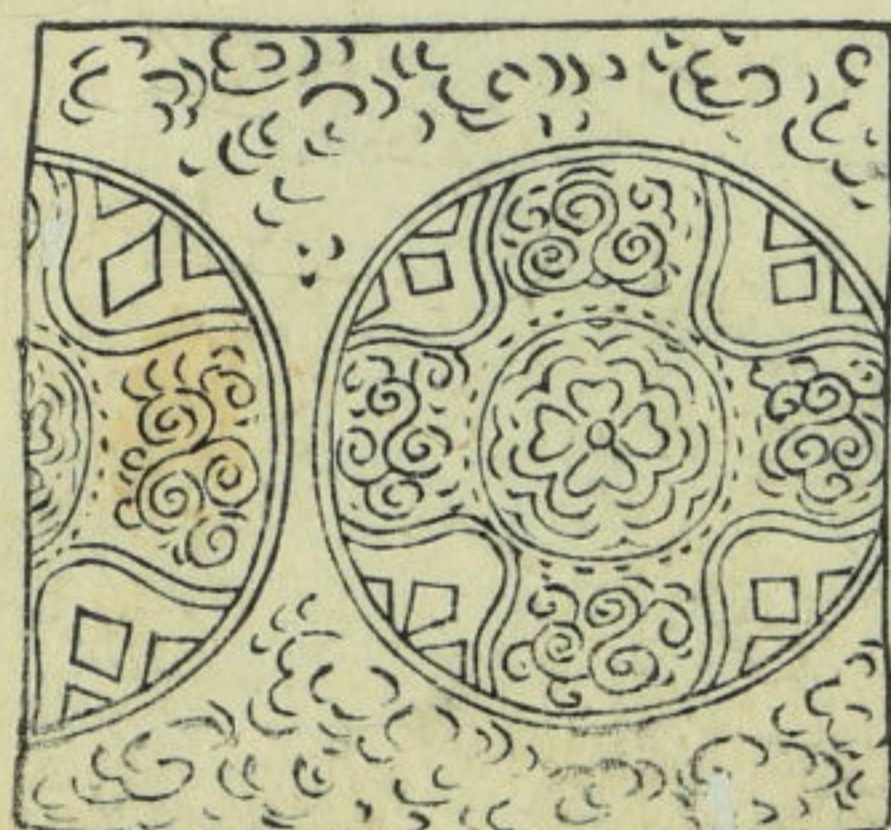
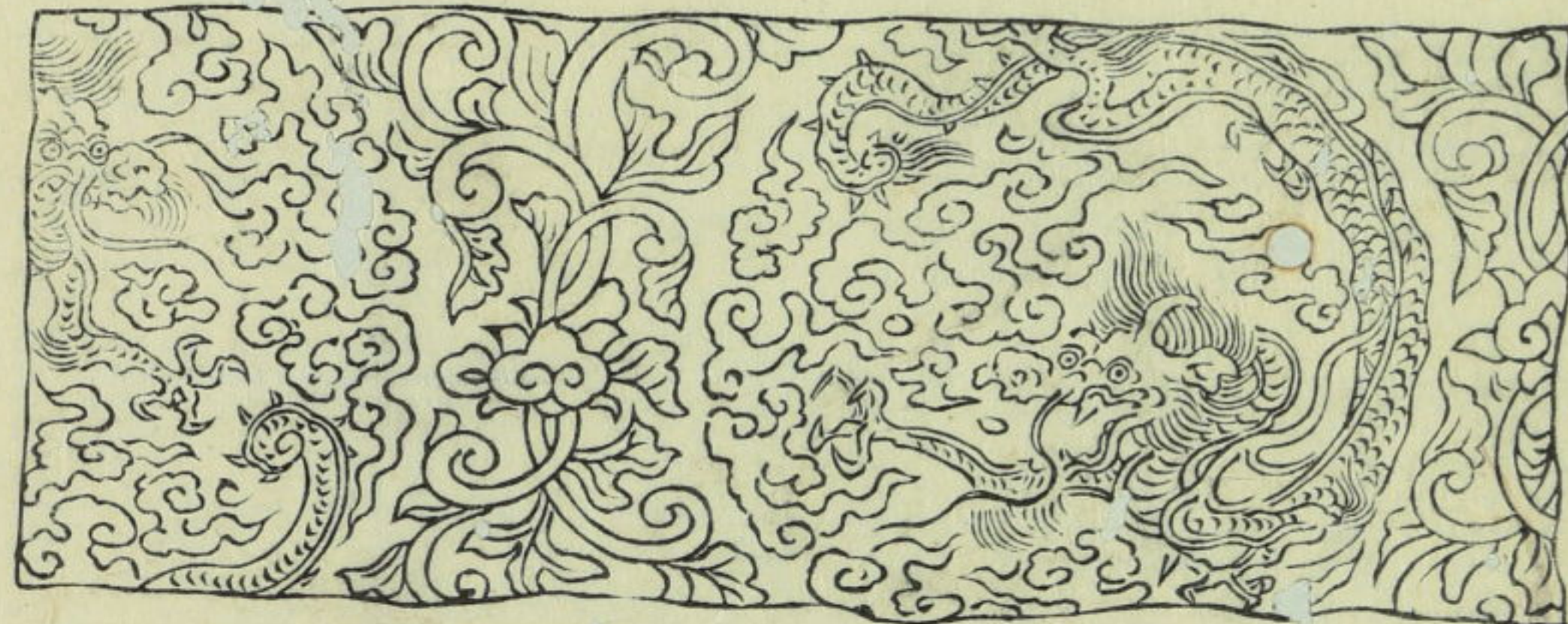
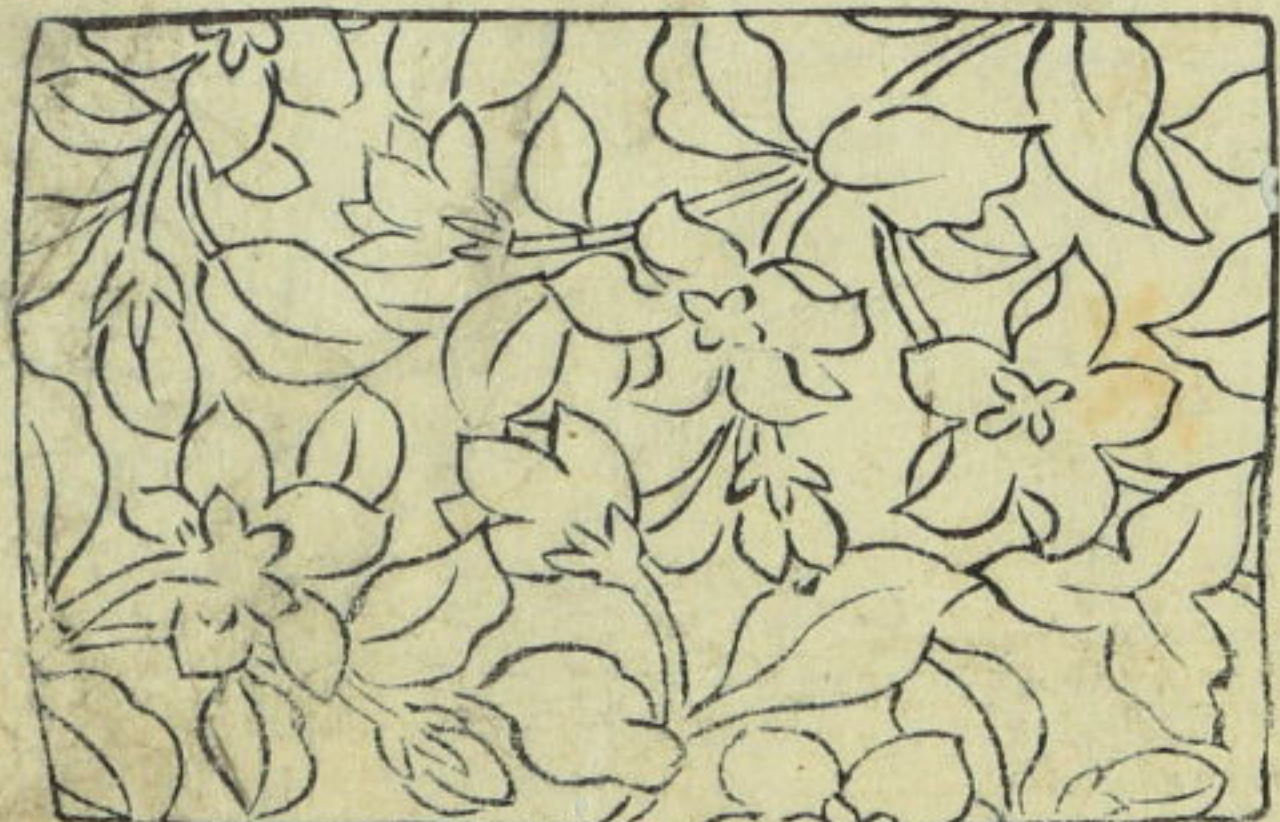
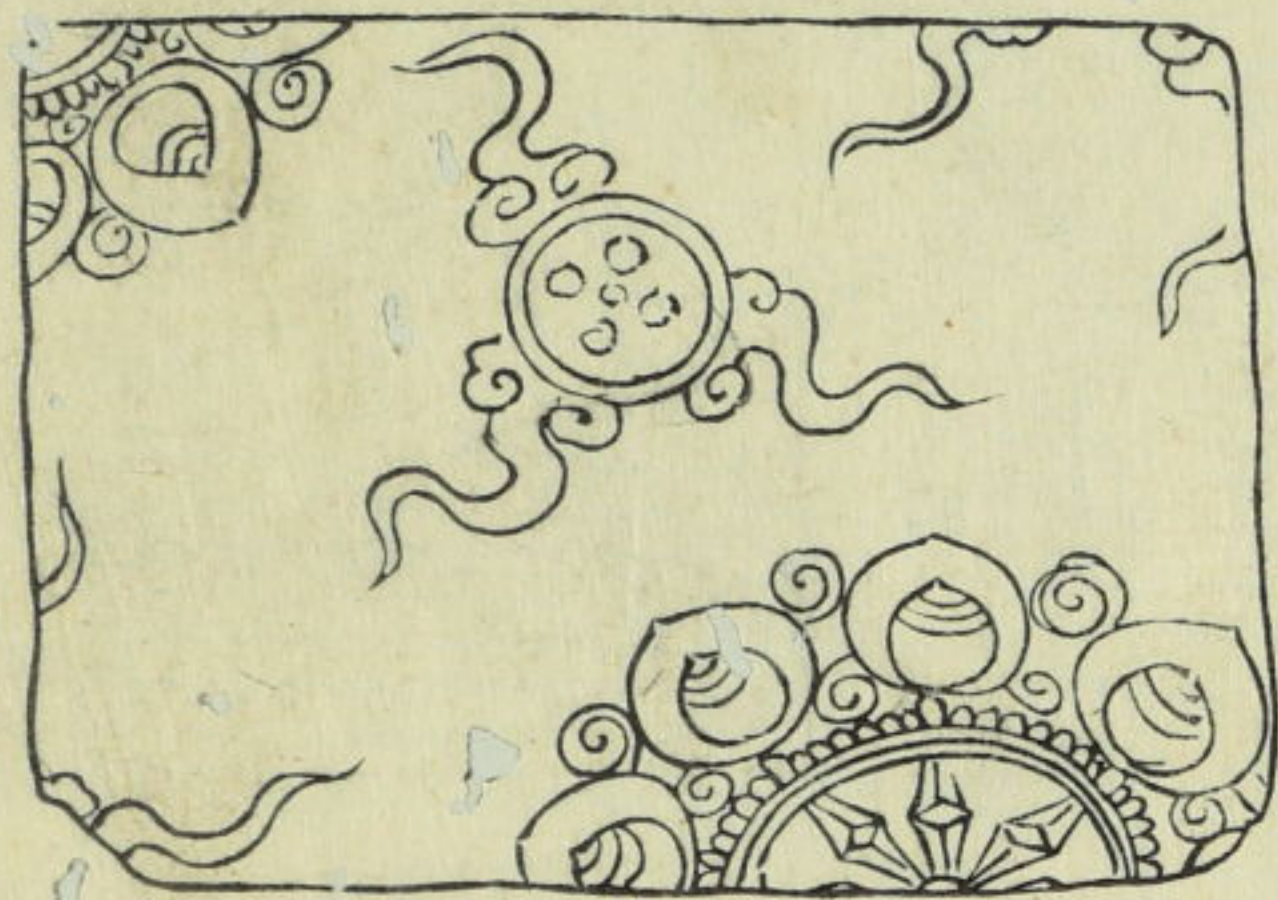
埶

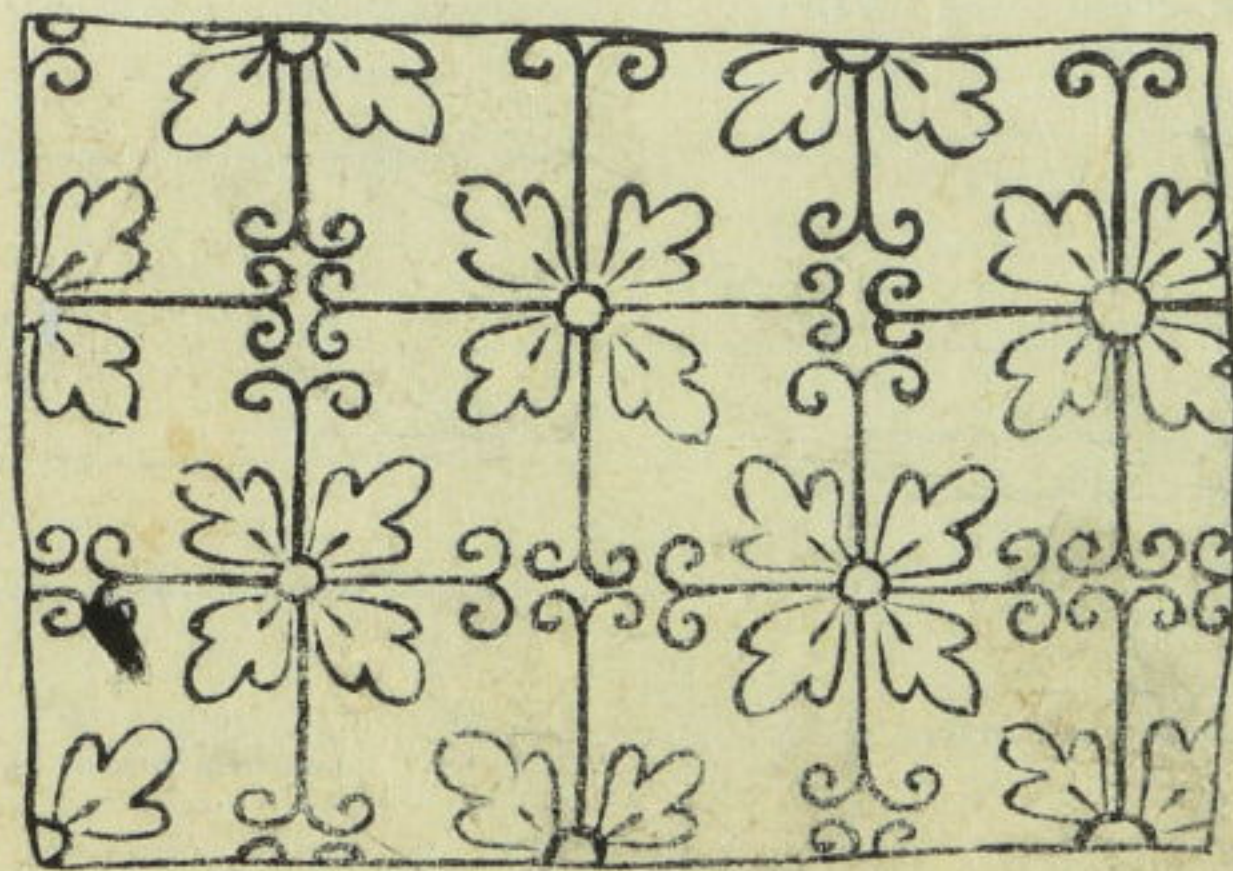
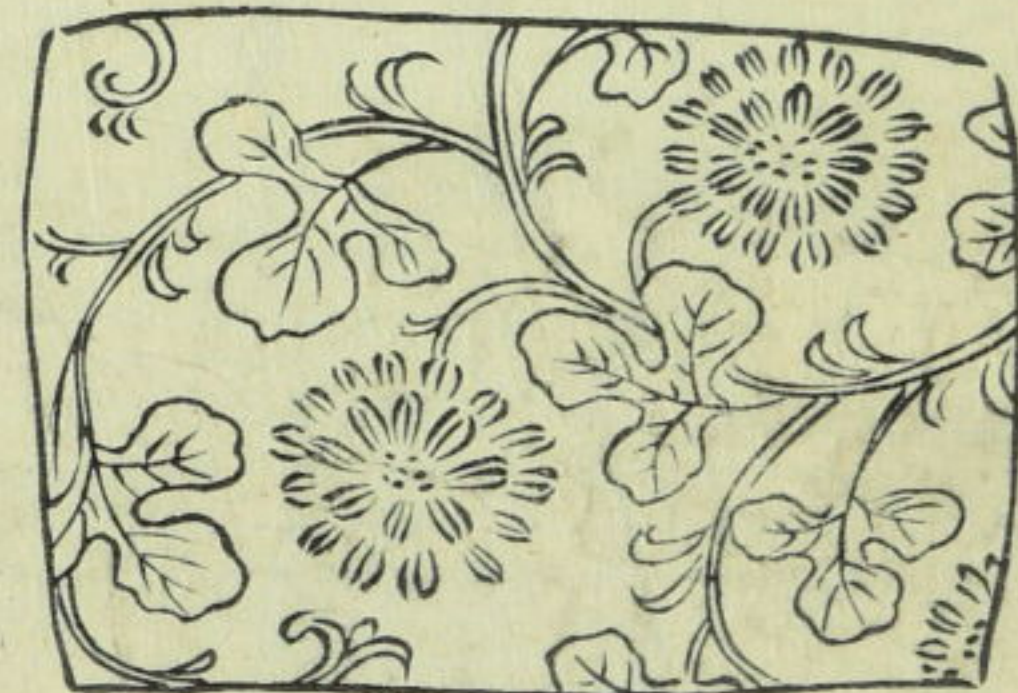
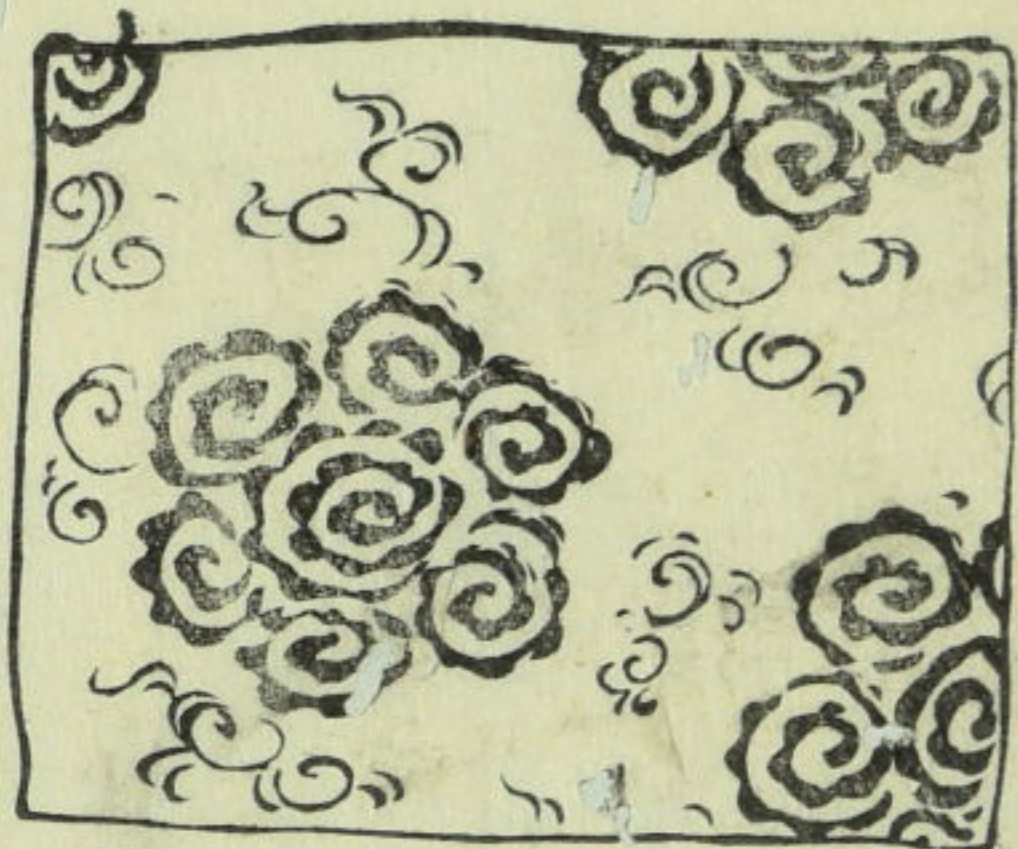
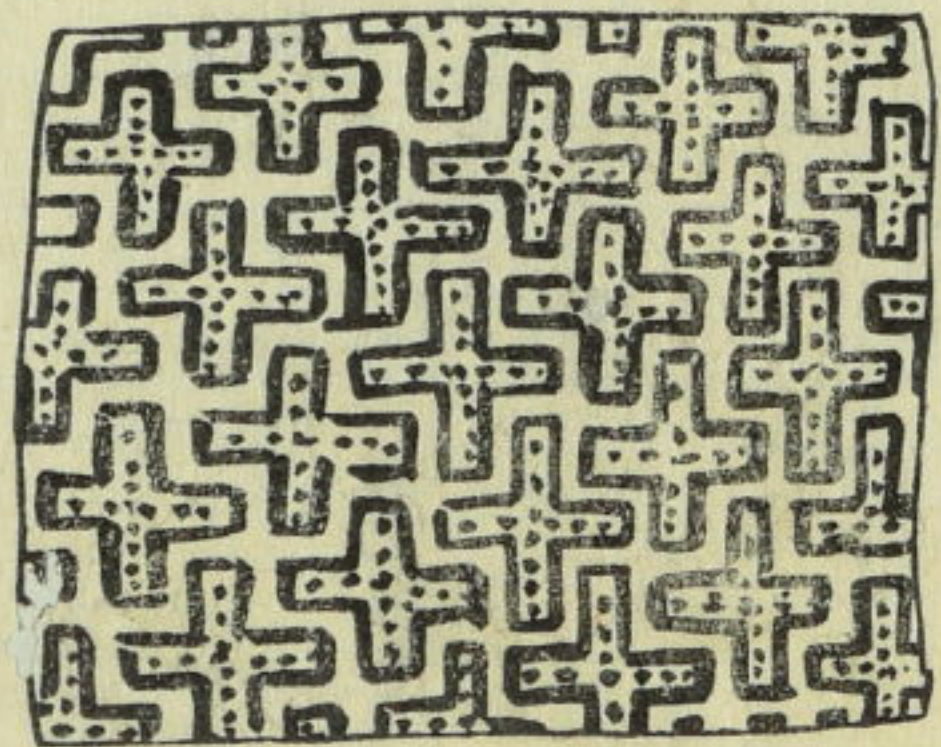
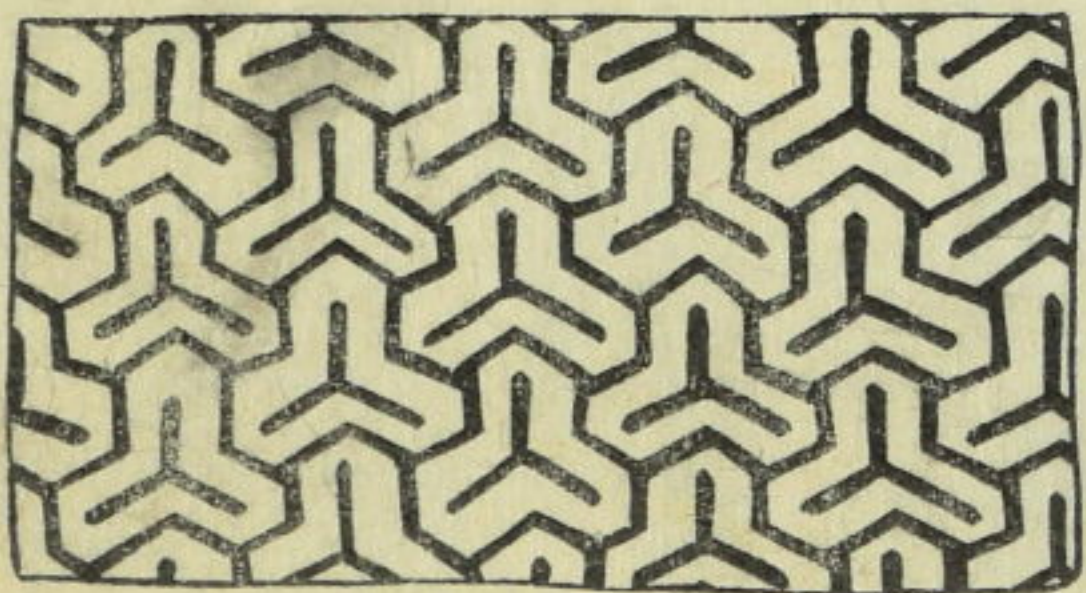
穢



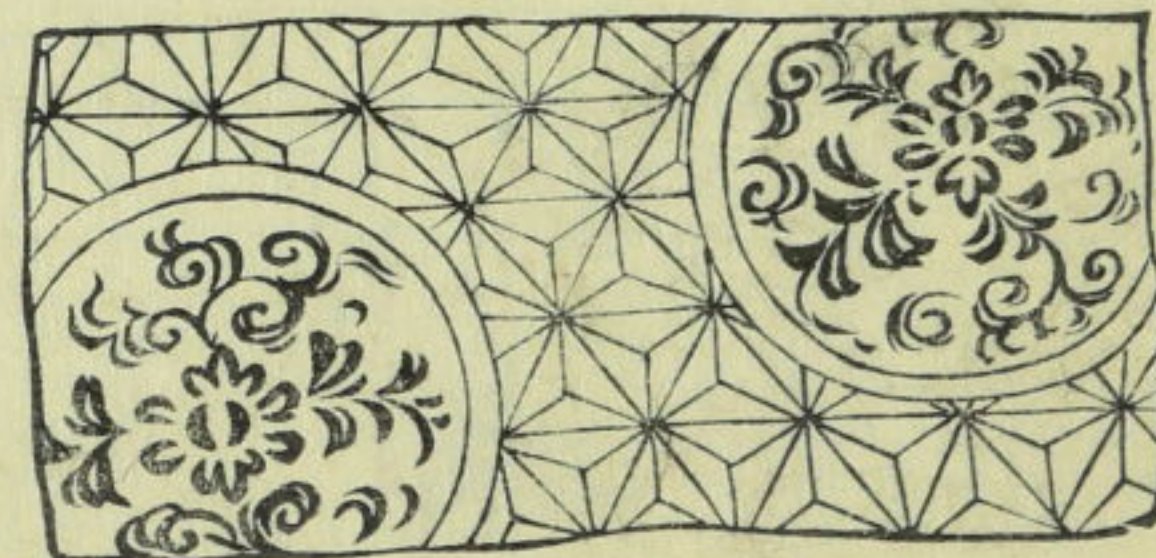
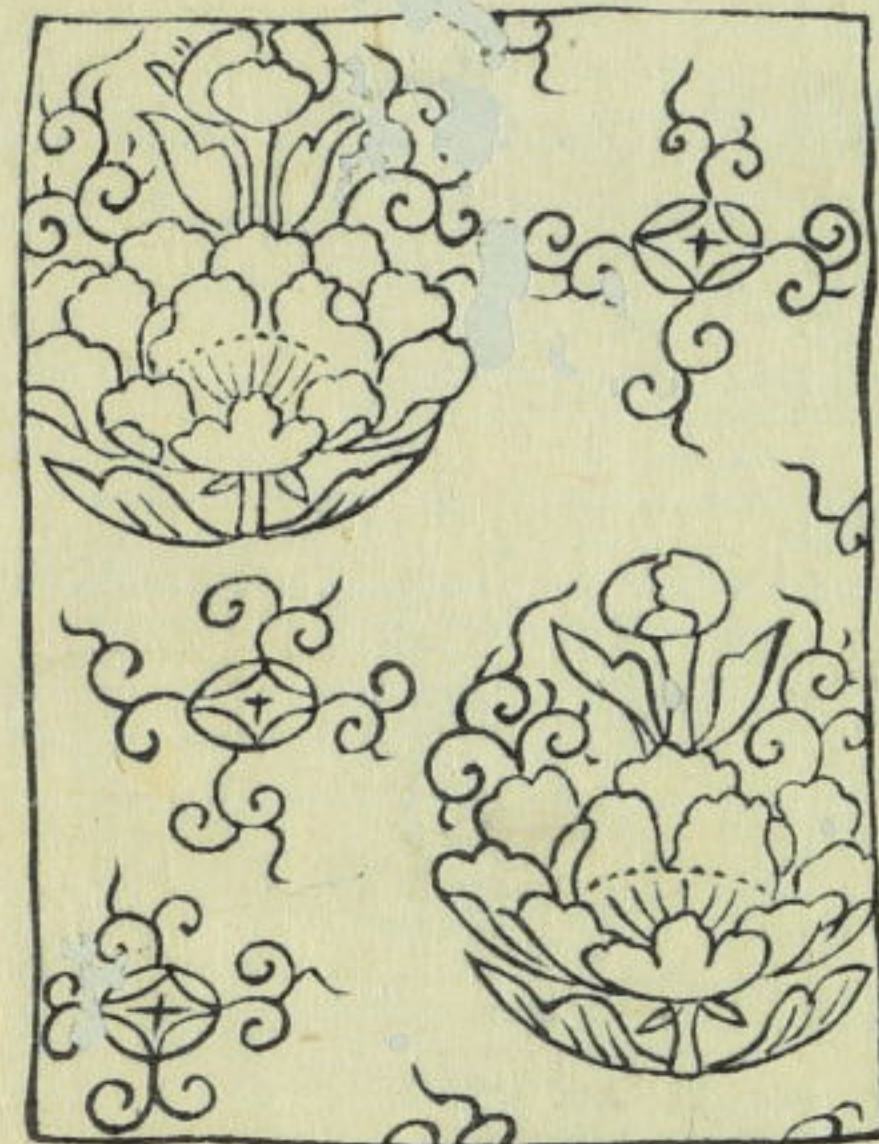
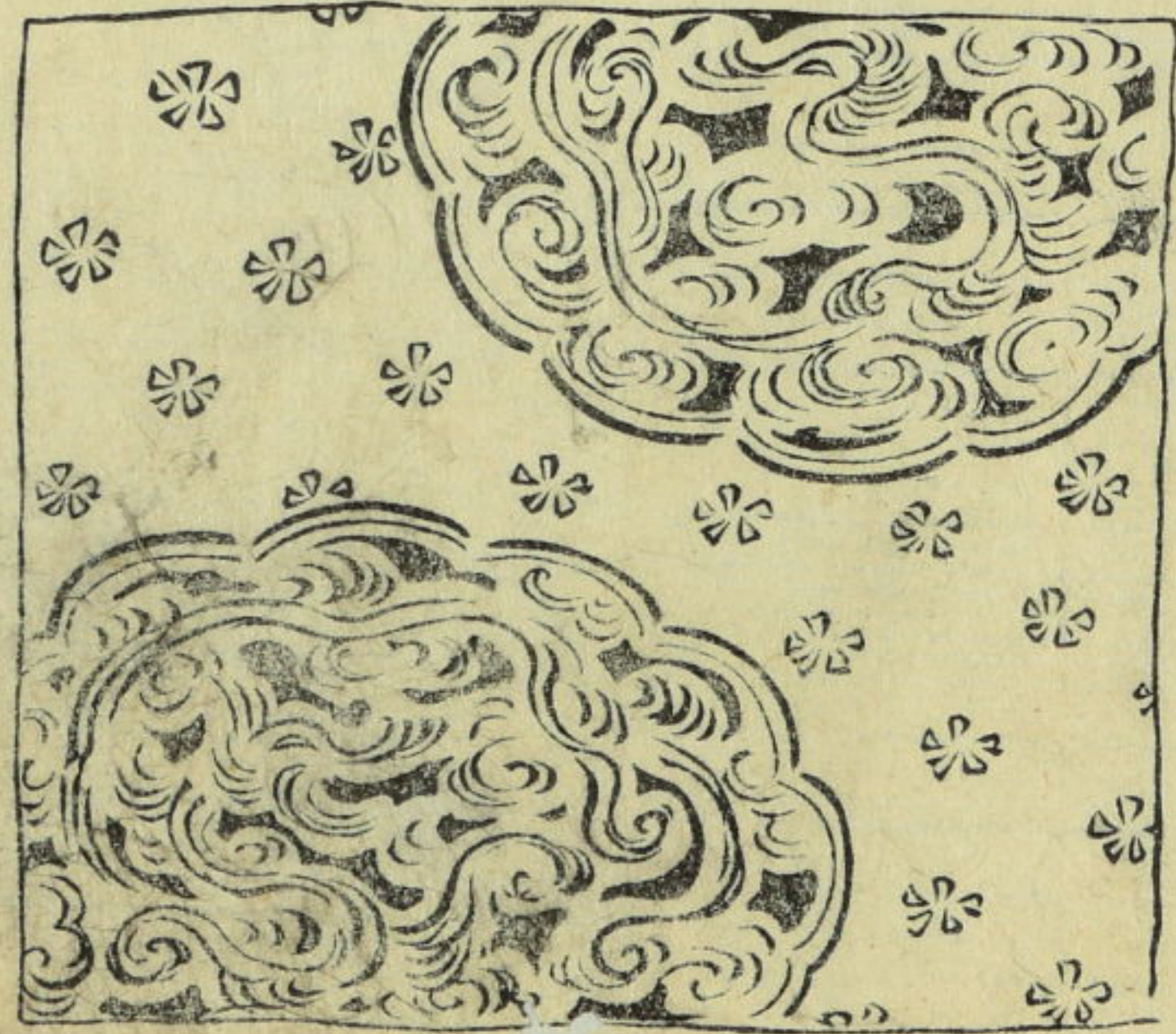
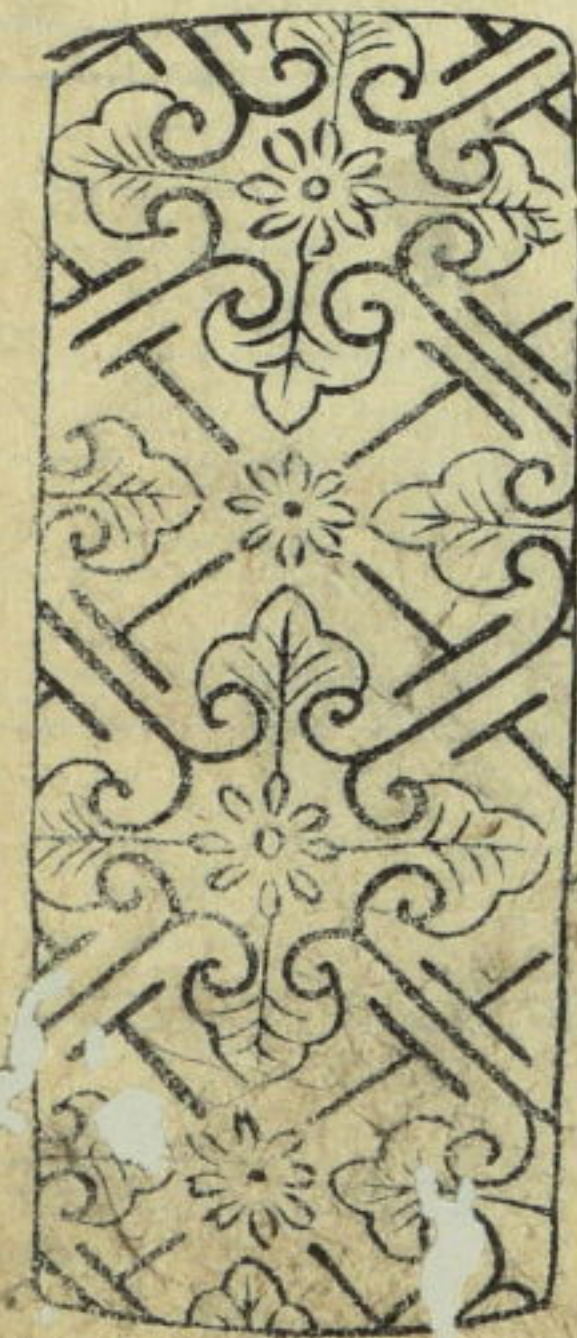
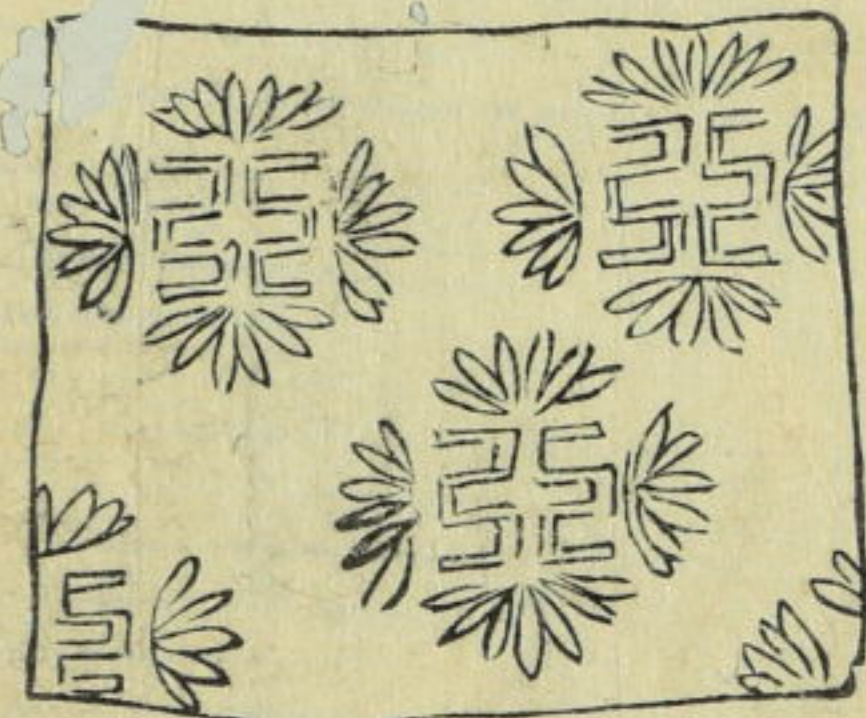
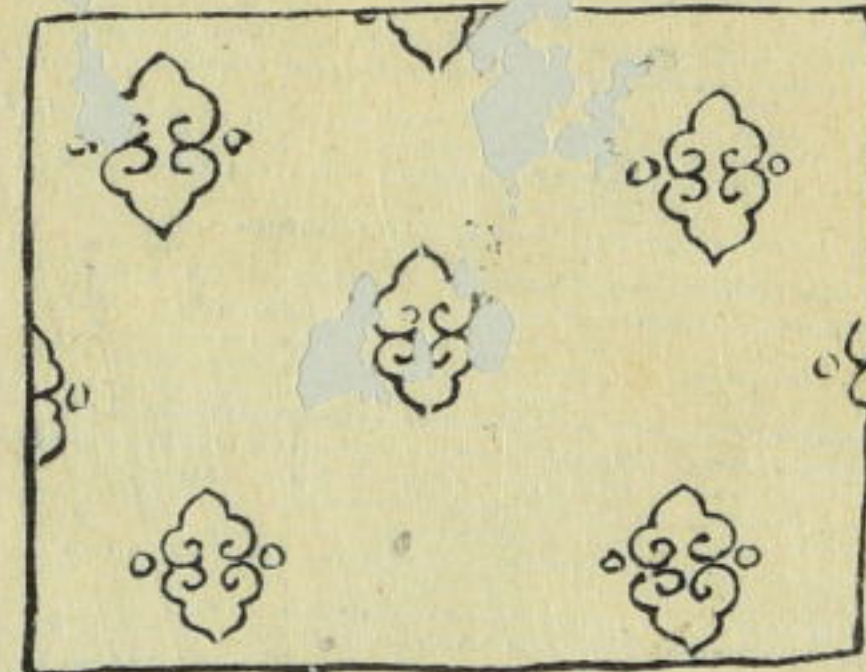
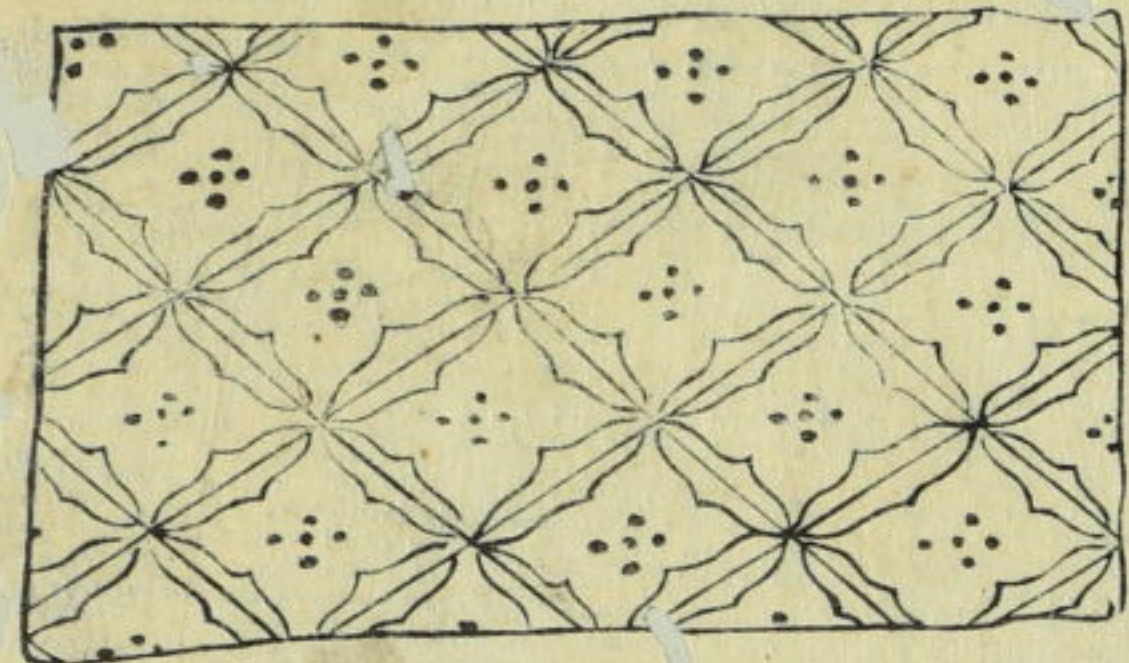
Handwritten characters or a mark at the top of the right page.



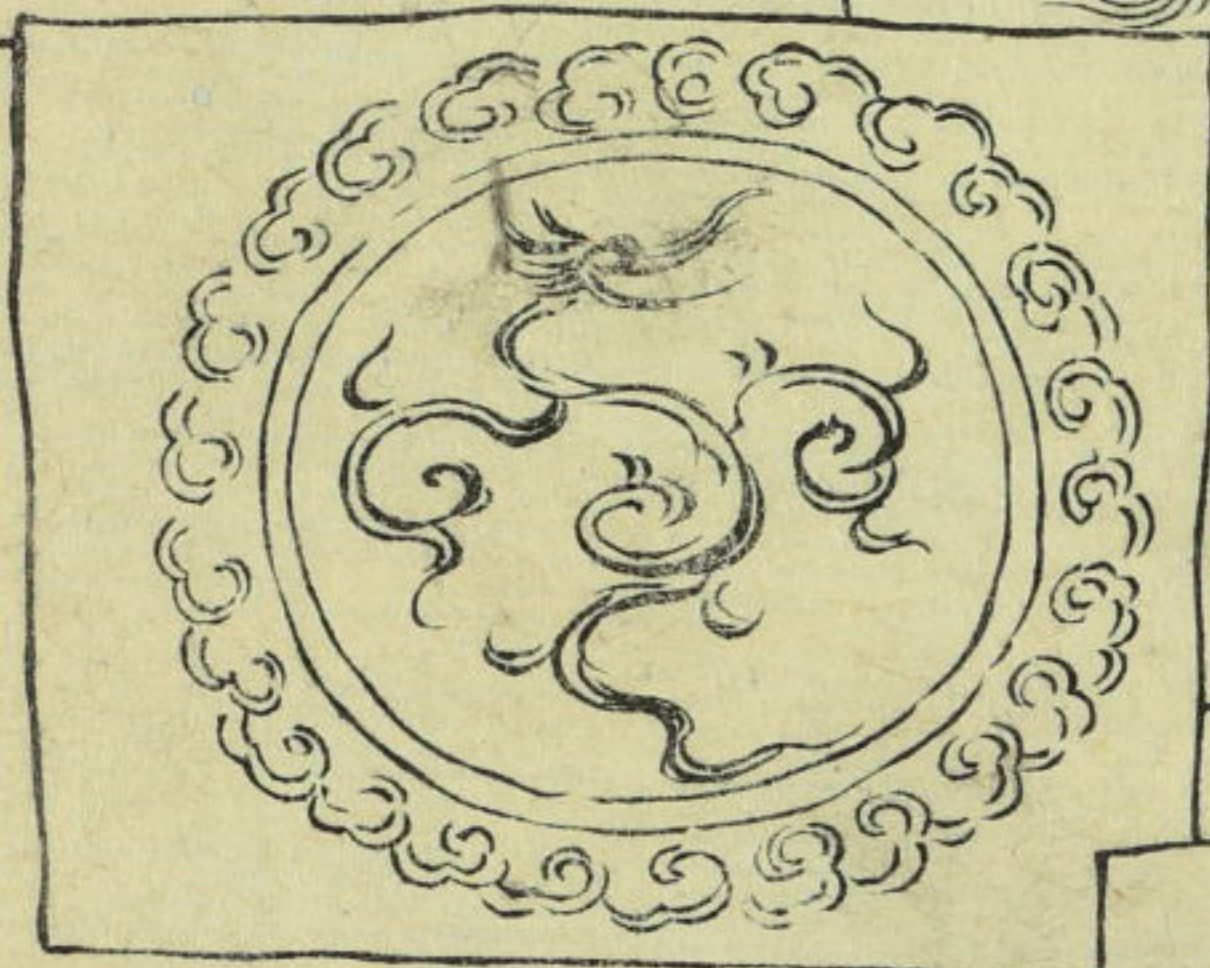
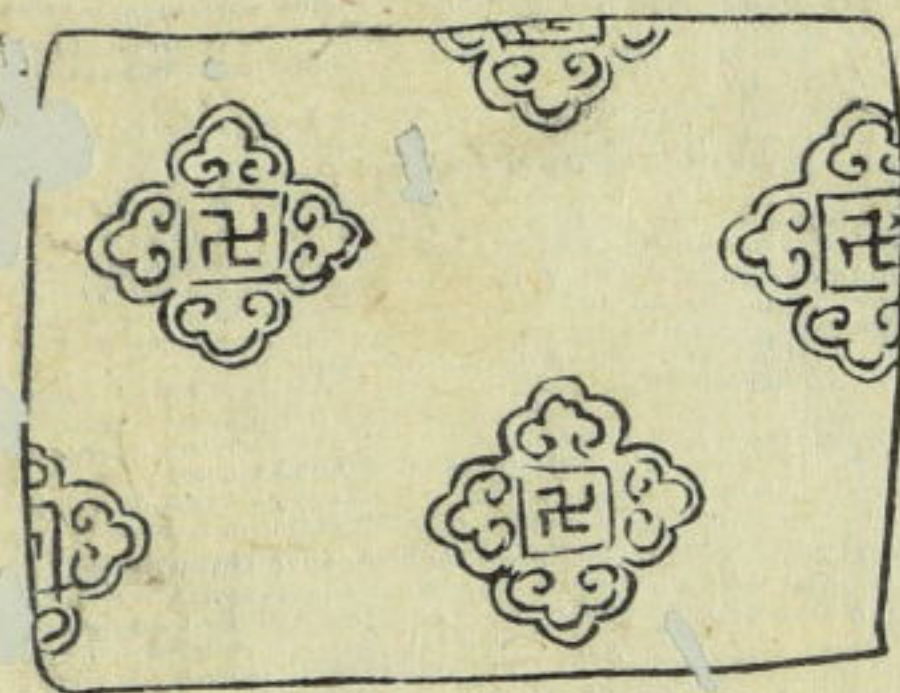




畫苑游覽五

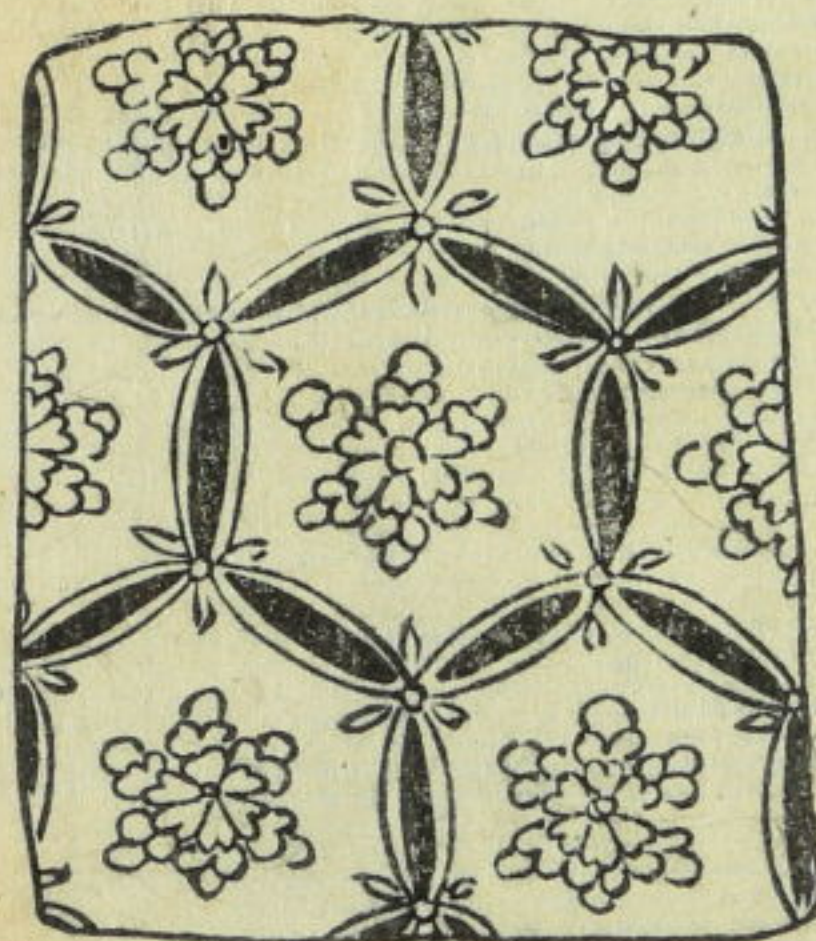
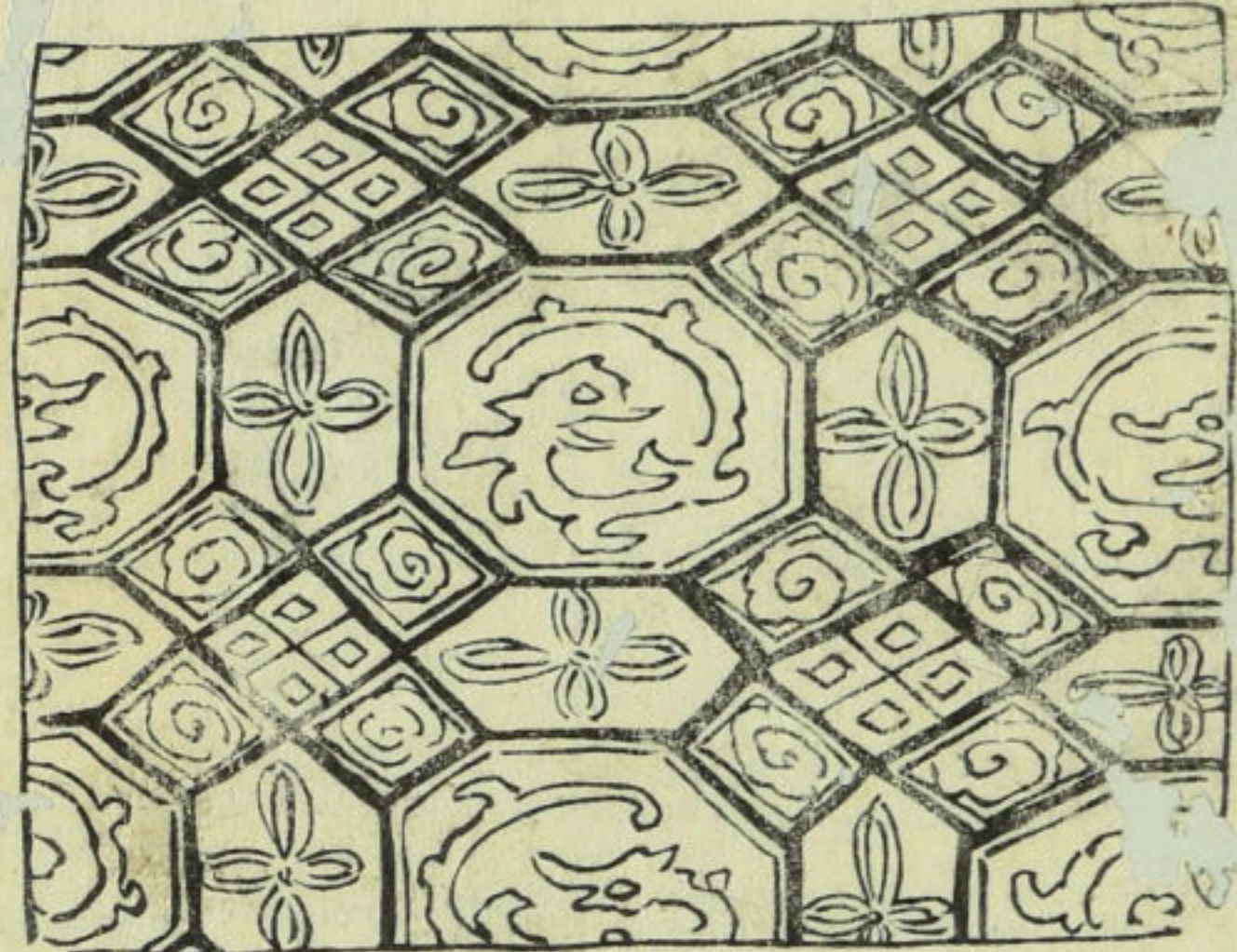
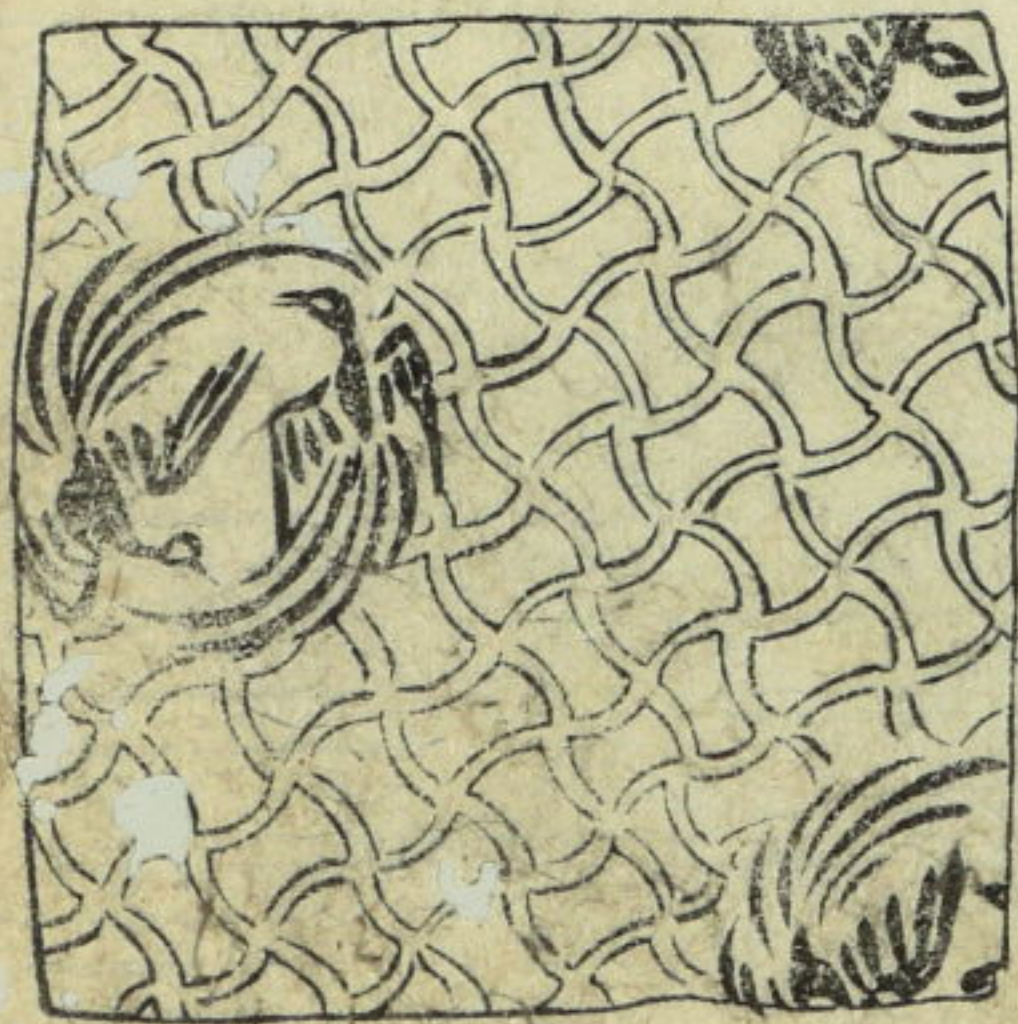


卷之五 雜錄

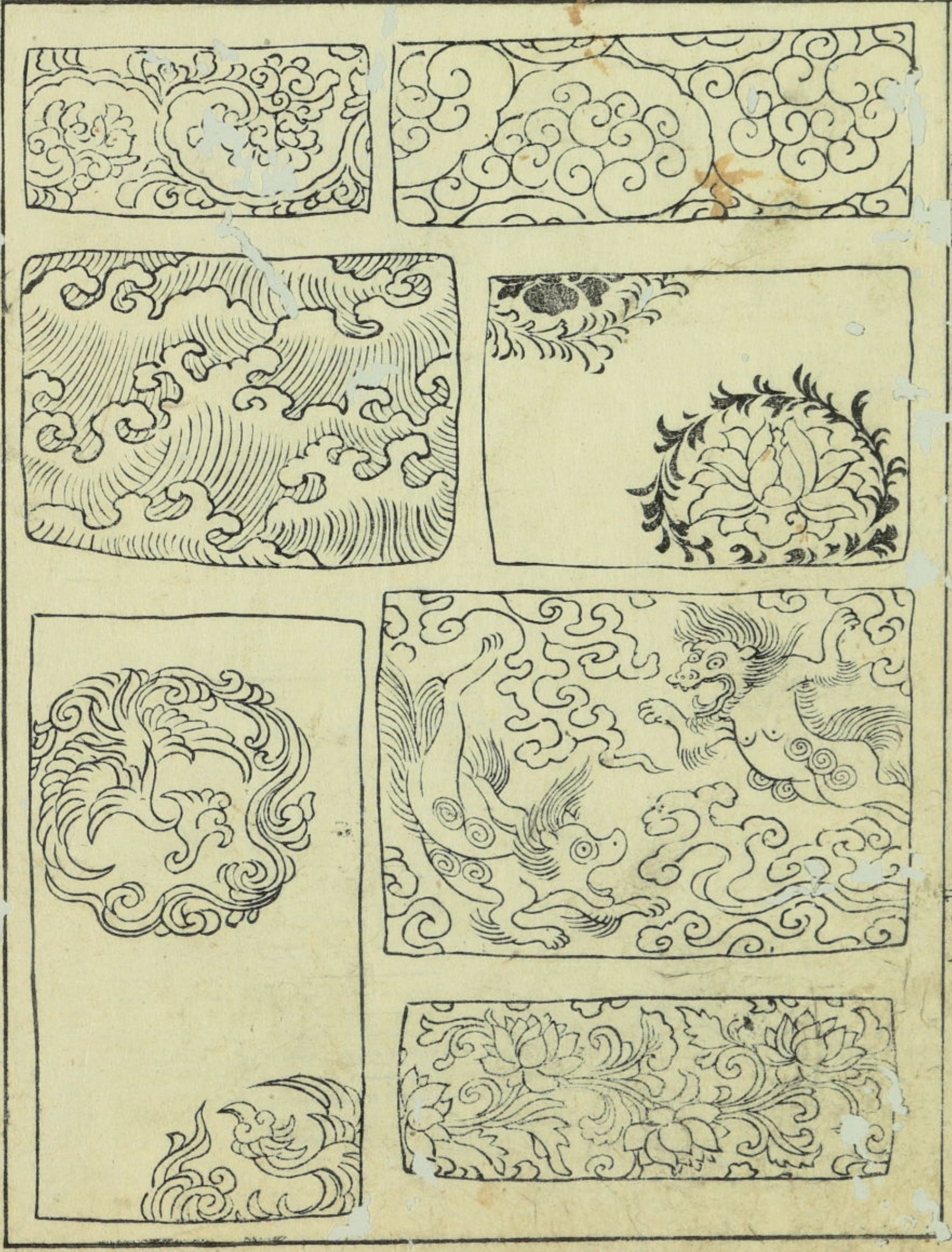
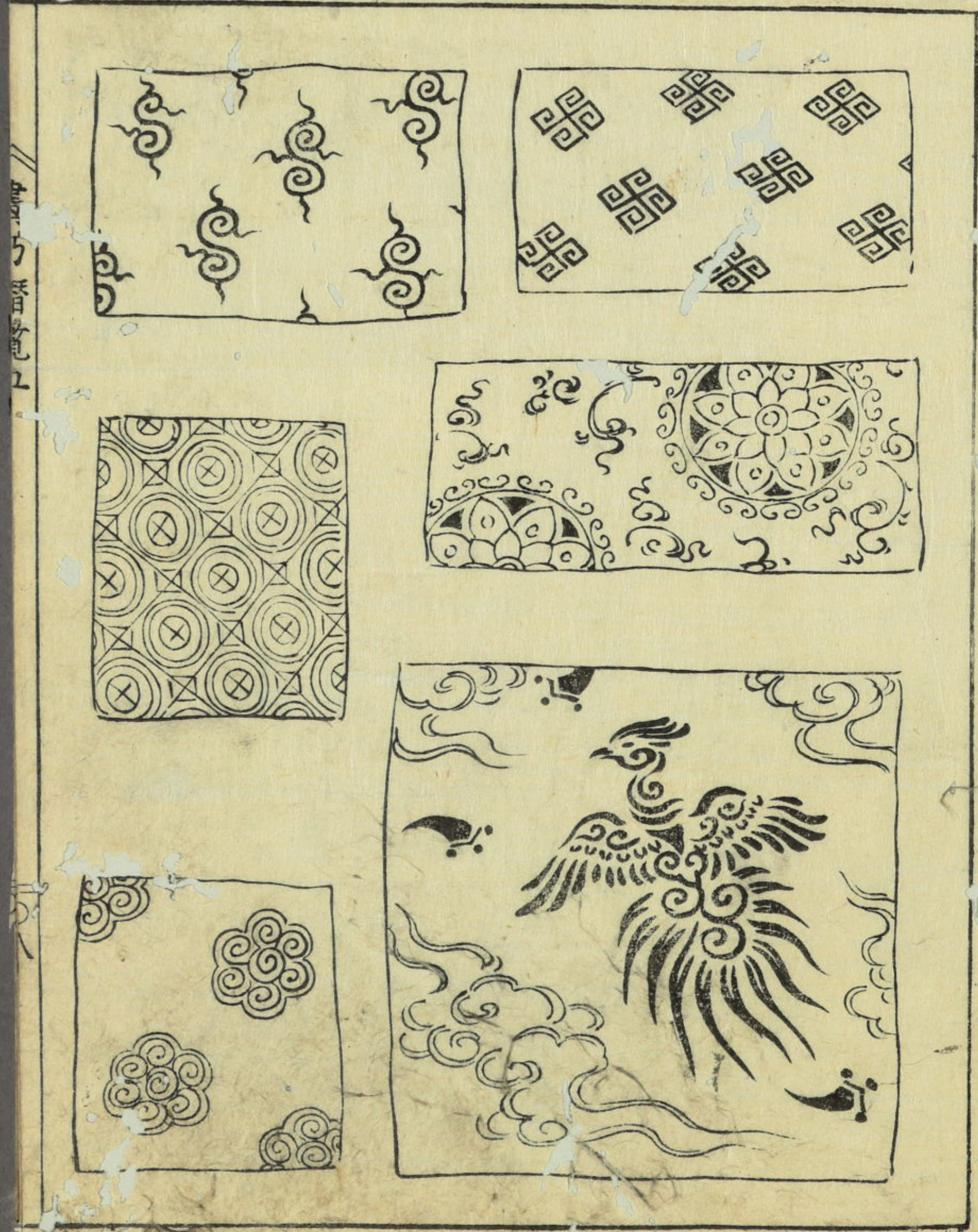


Handwritten vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title.

Handwritten vertical text on the right edge of the page, likely a page number or title.

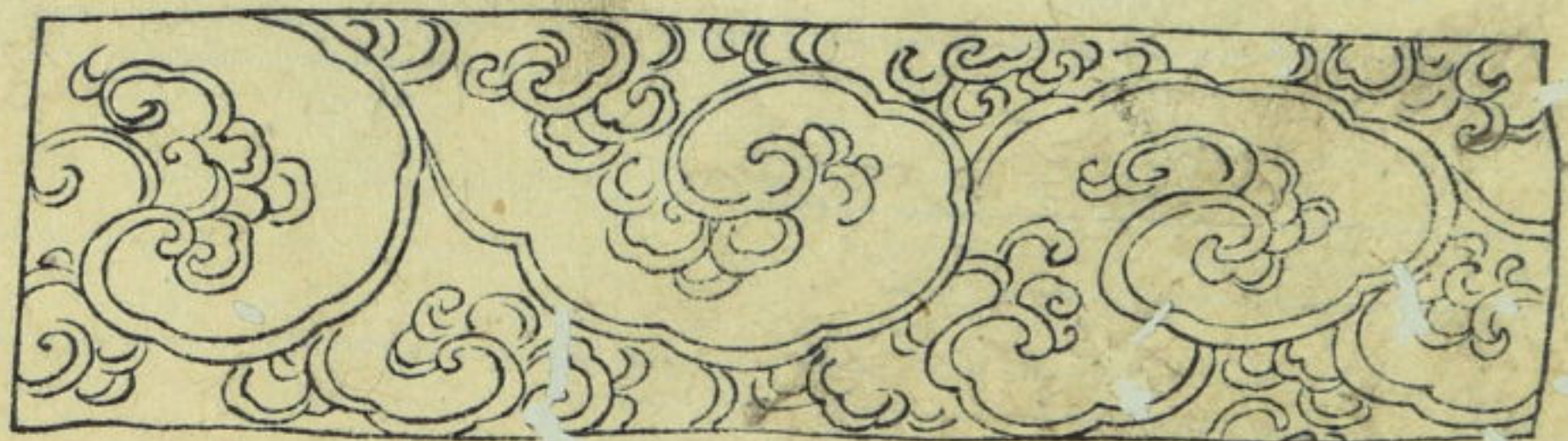
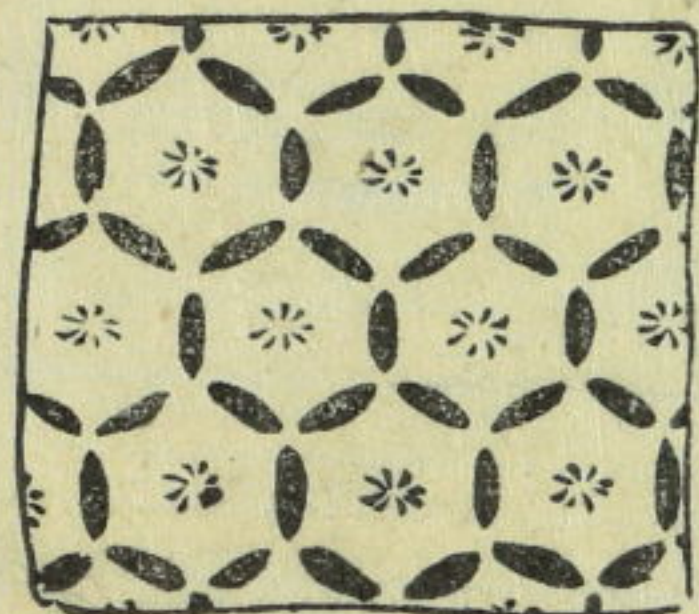
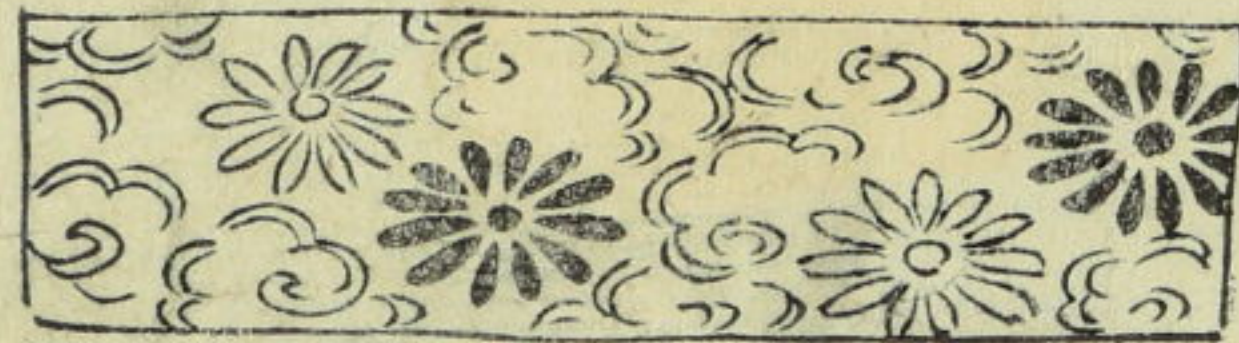
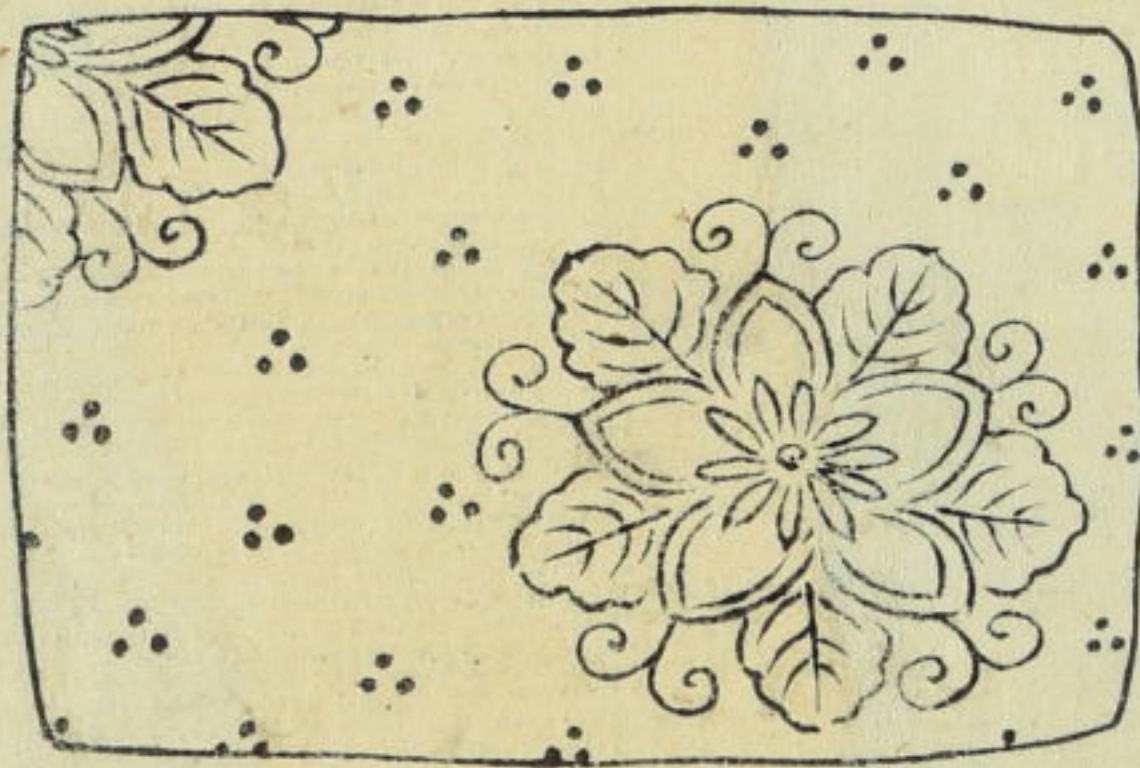
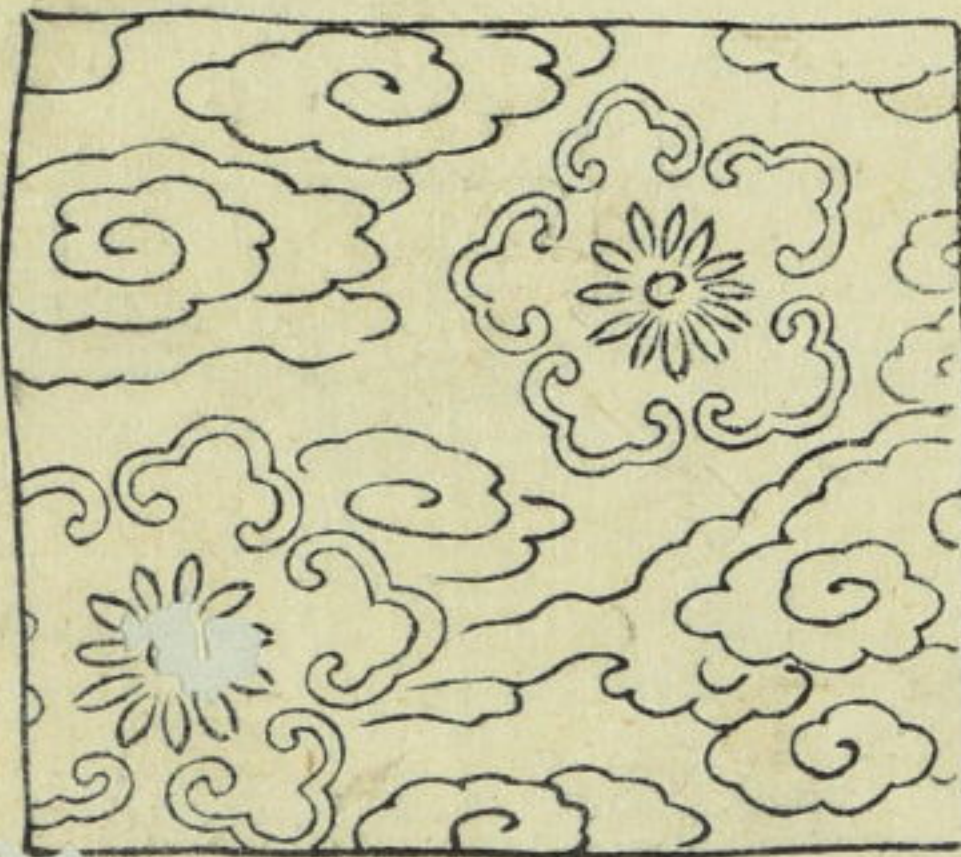
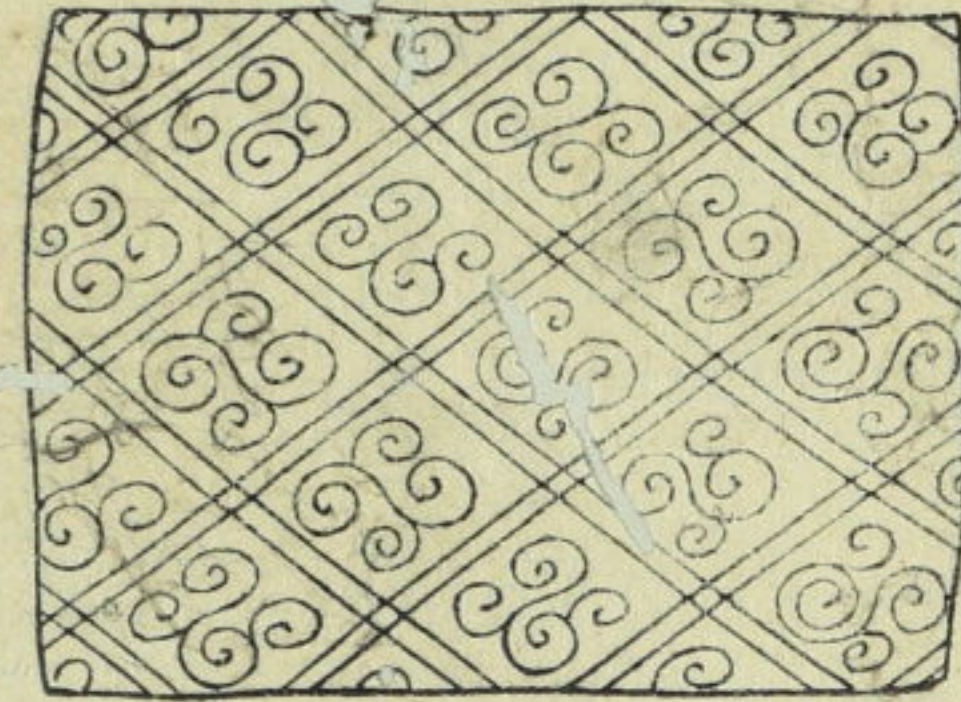


卷之五 雜圖

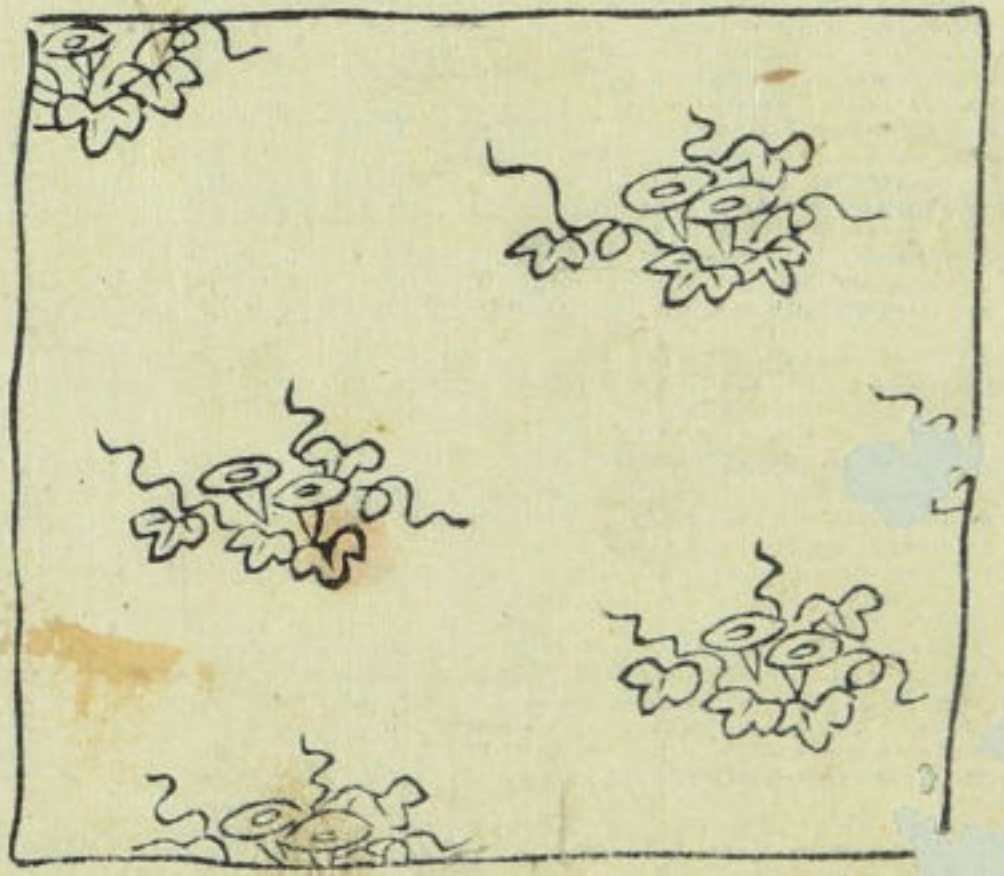
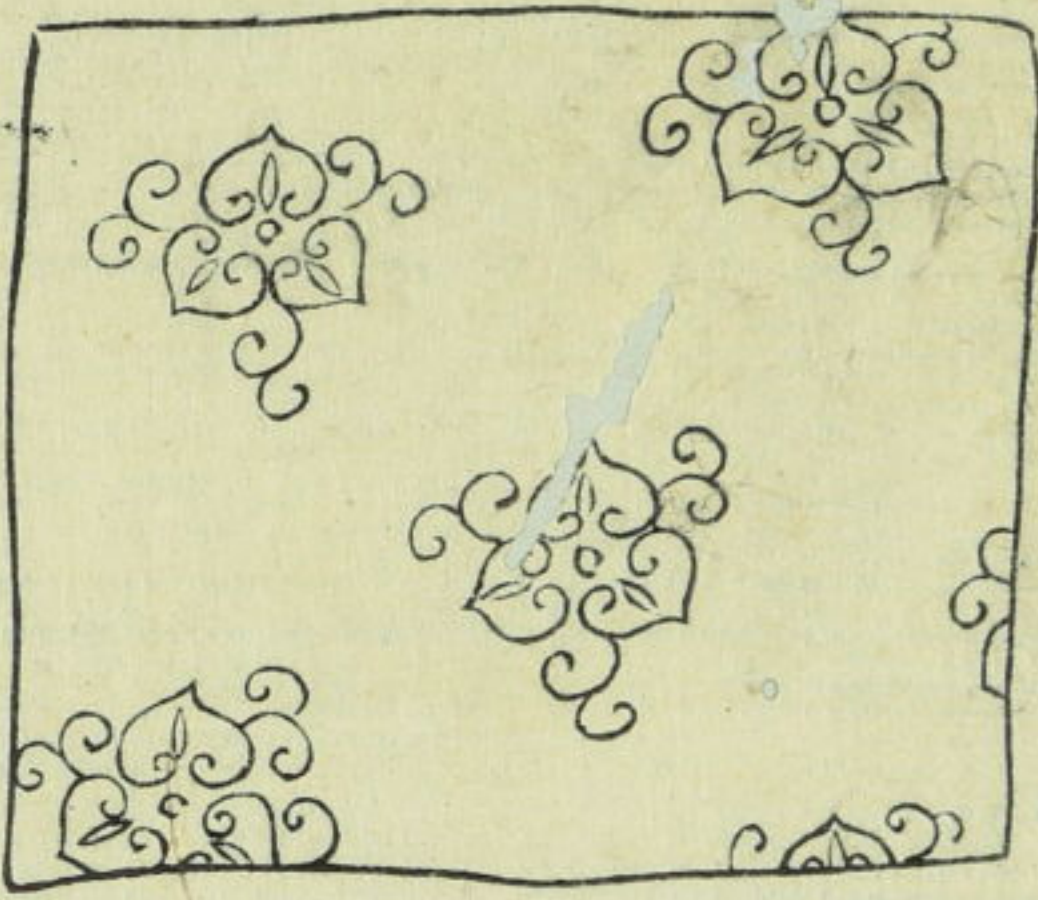
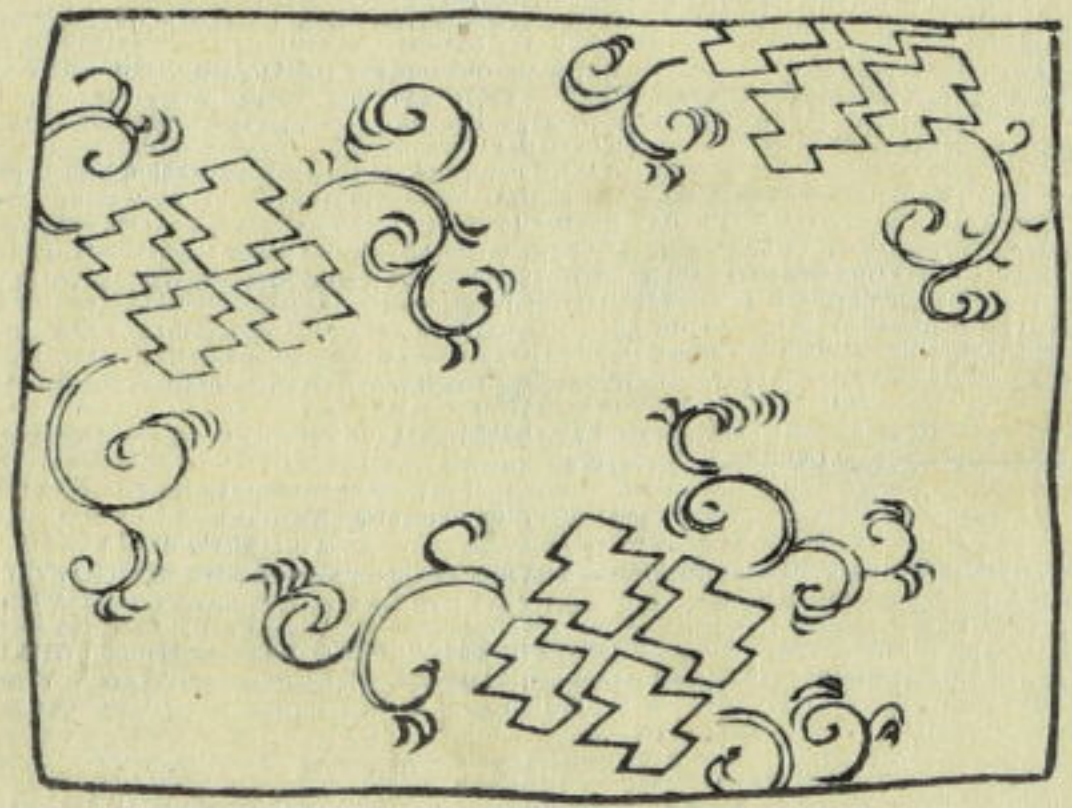
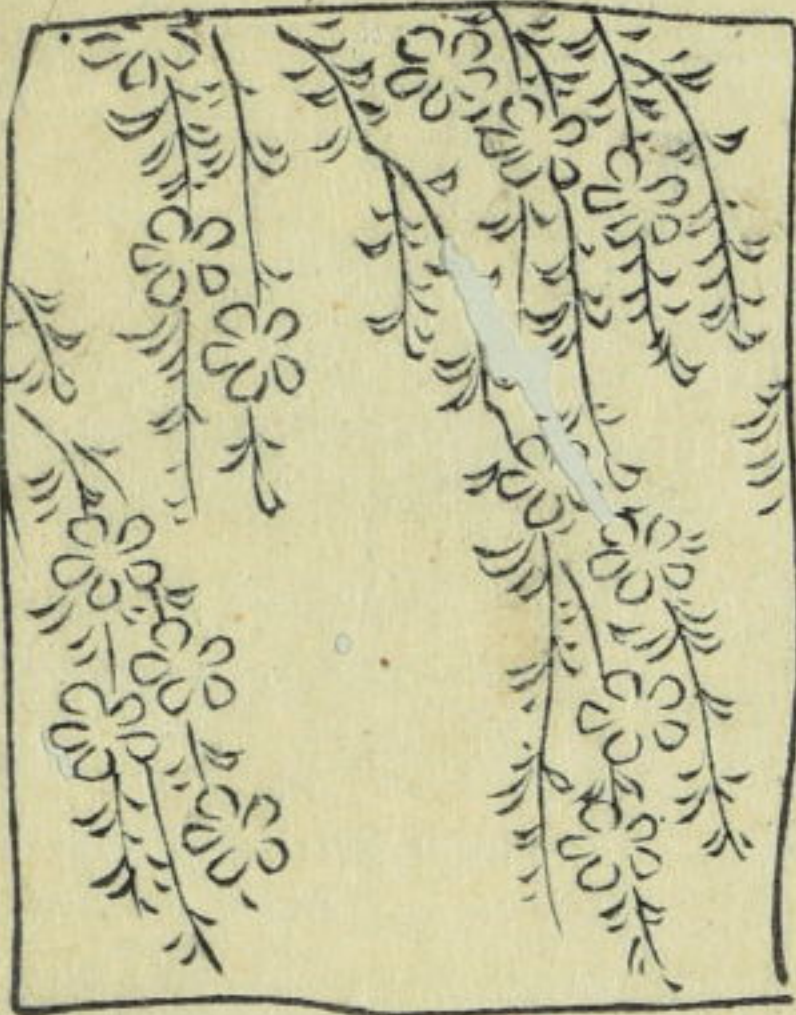


卷之五 雜圖

七

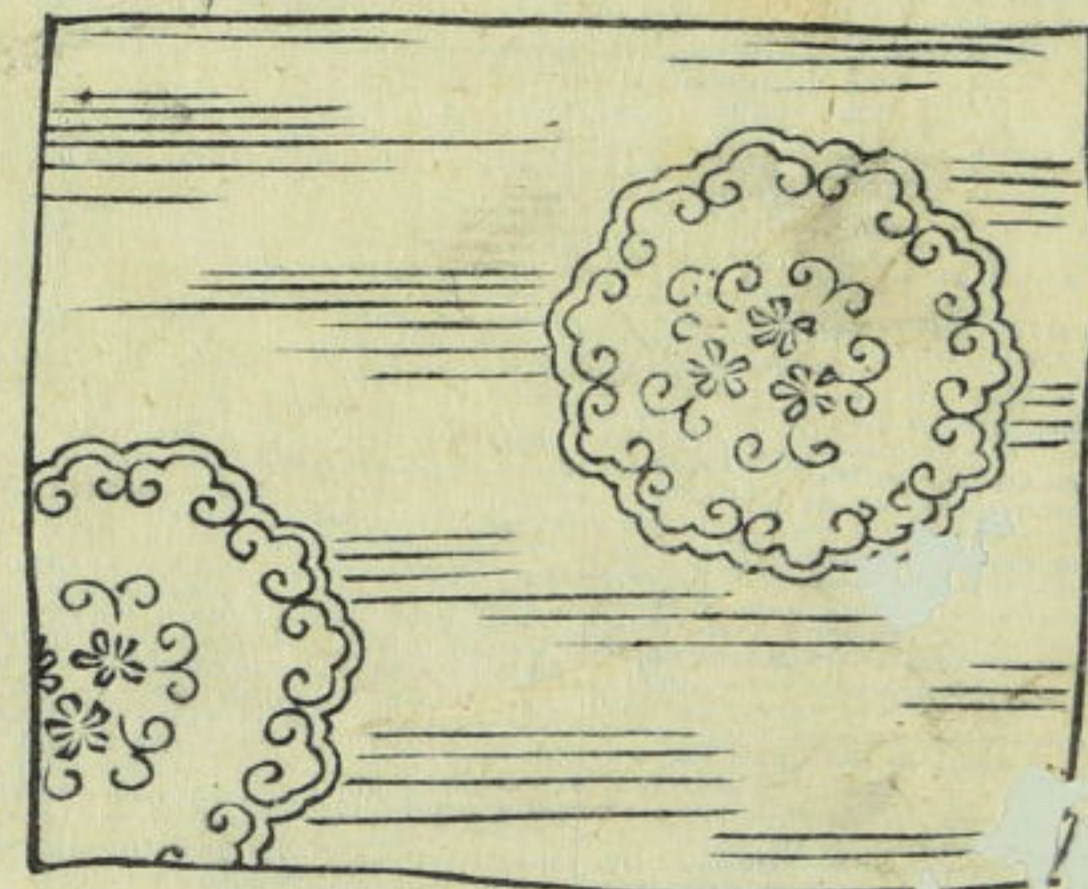
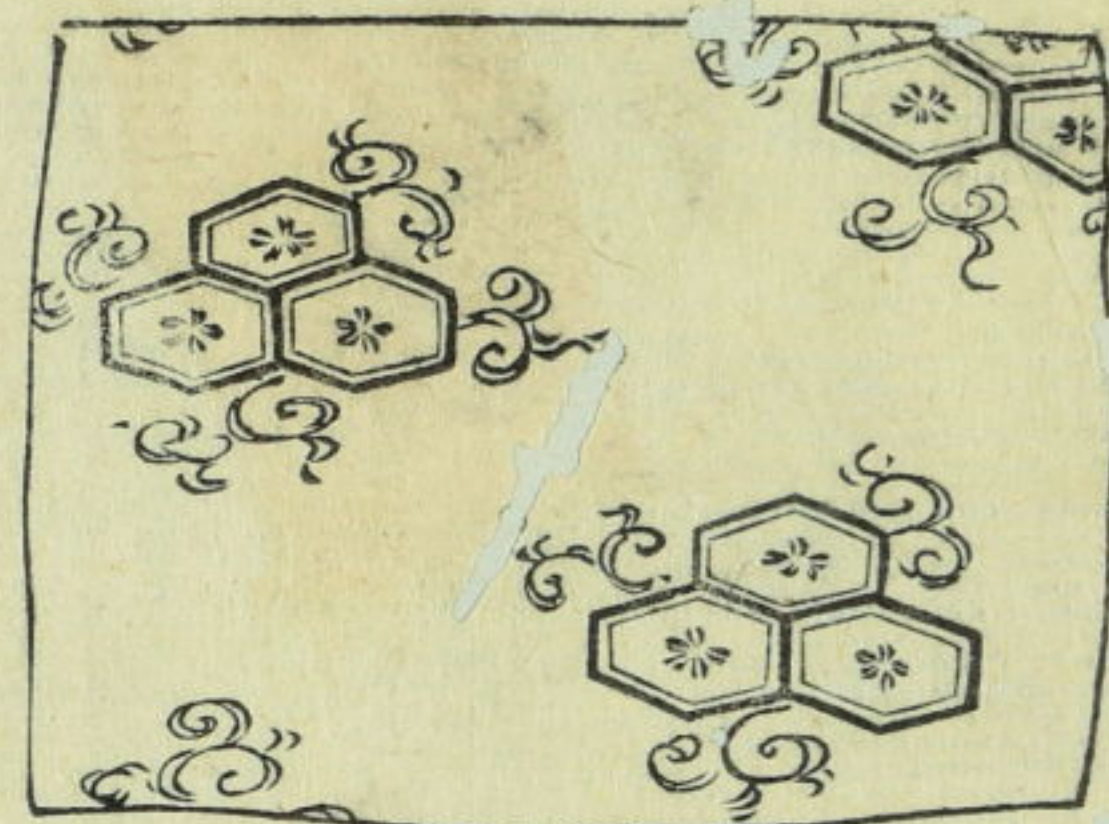
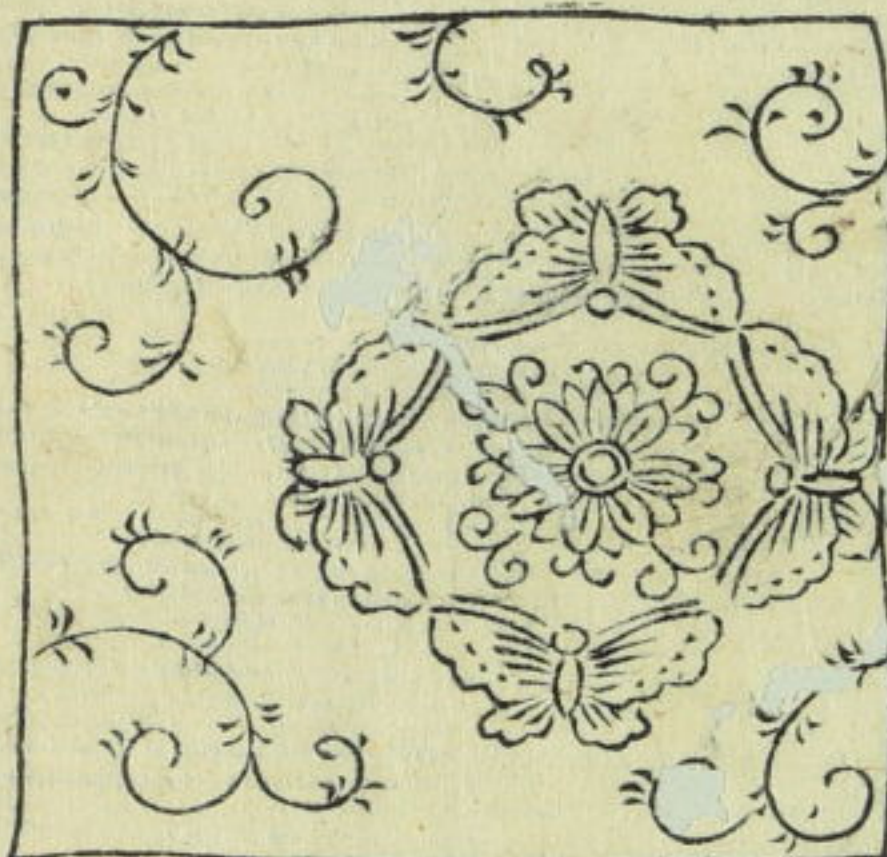
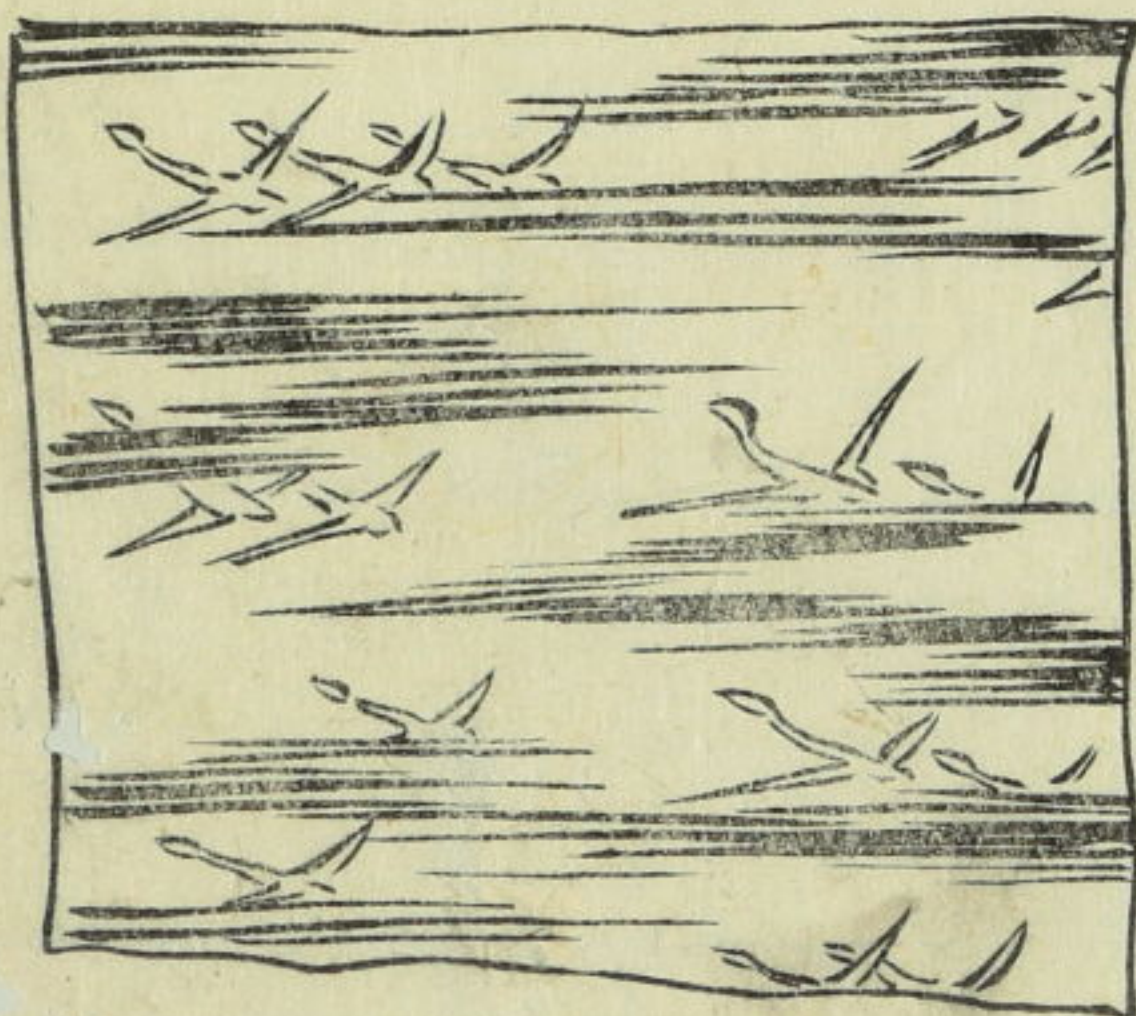


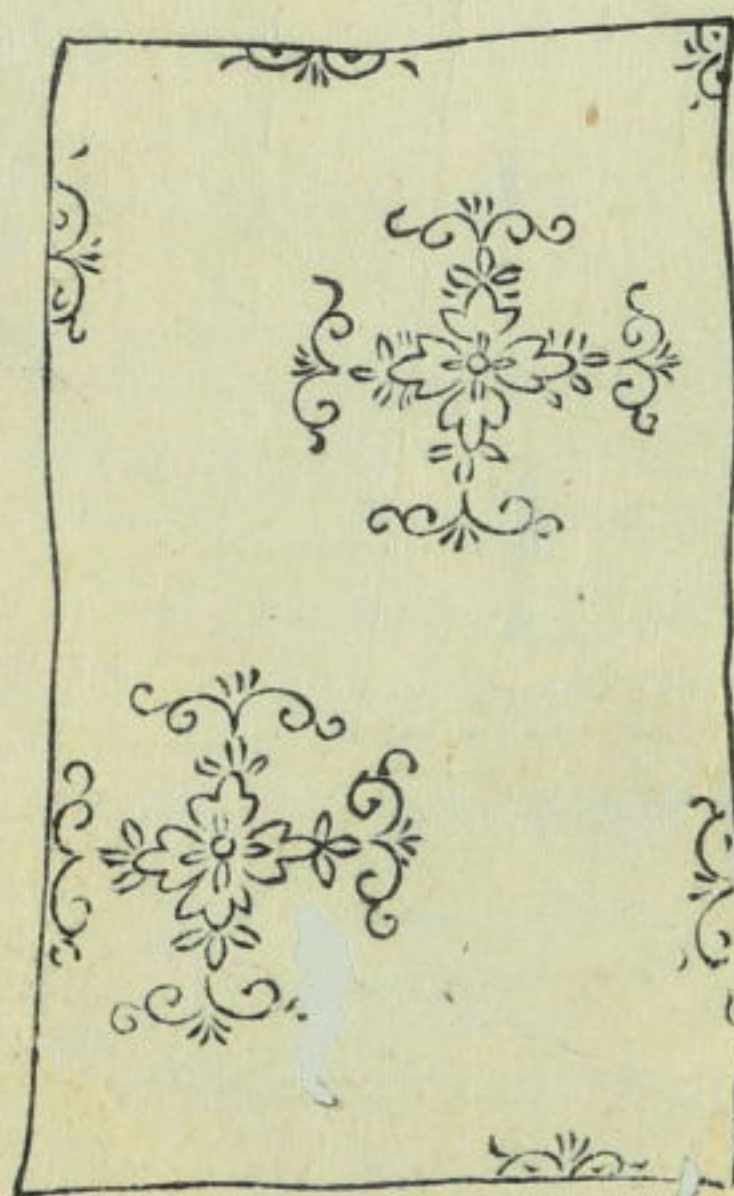
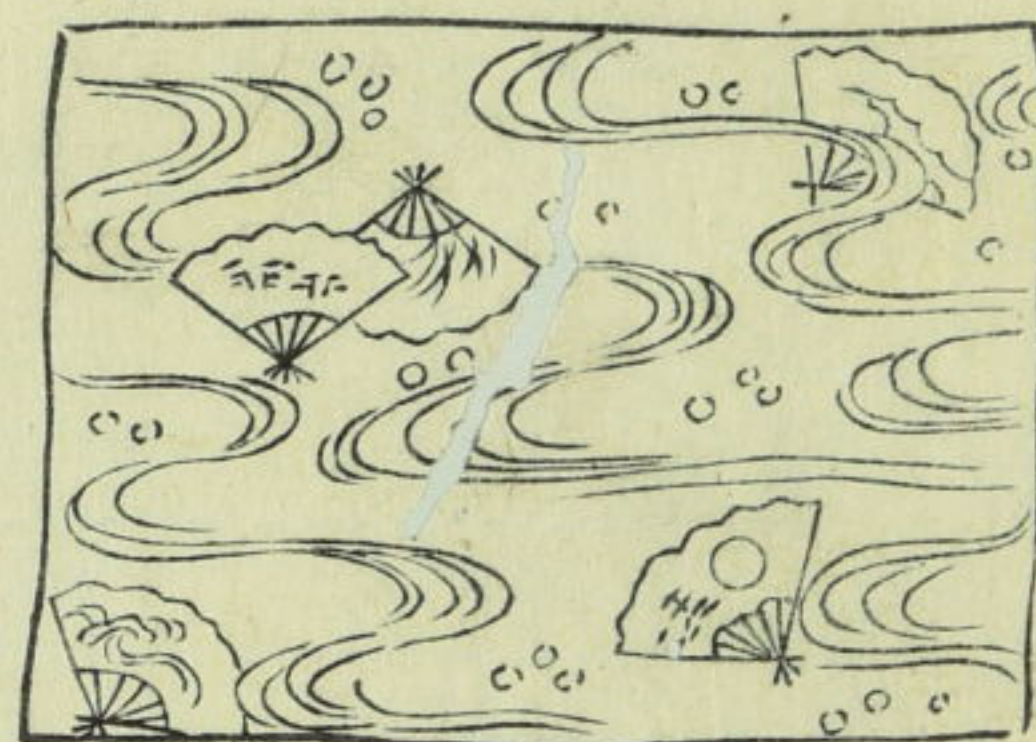
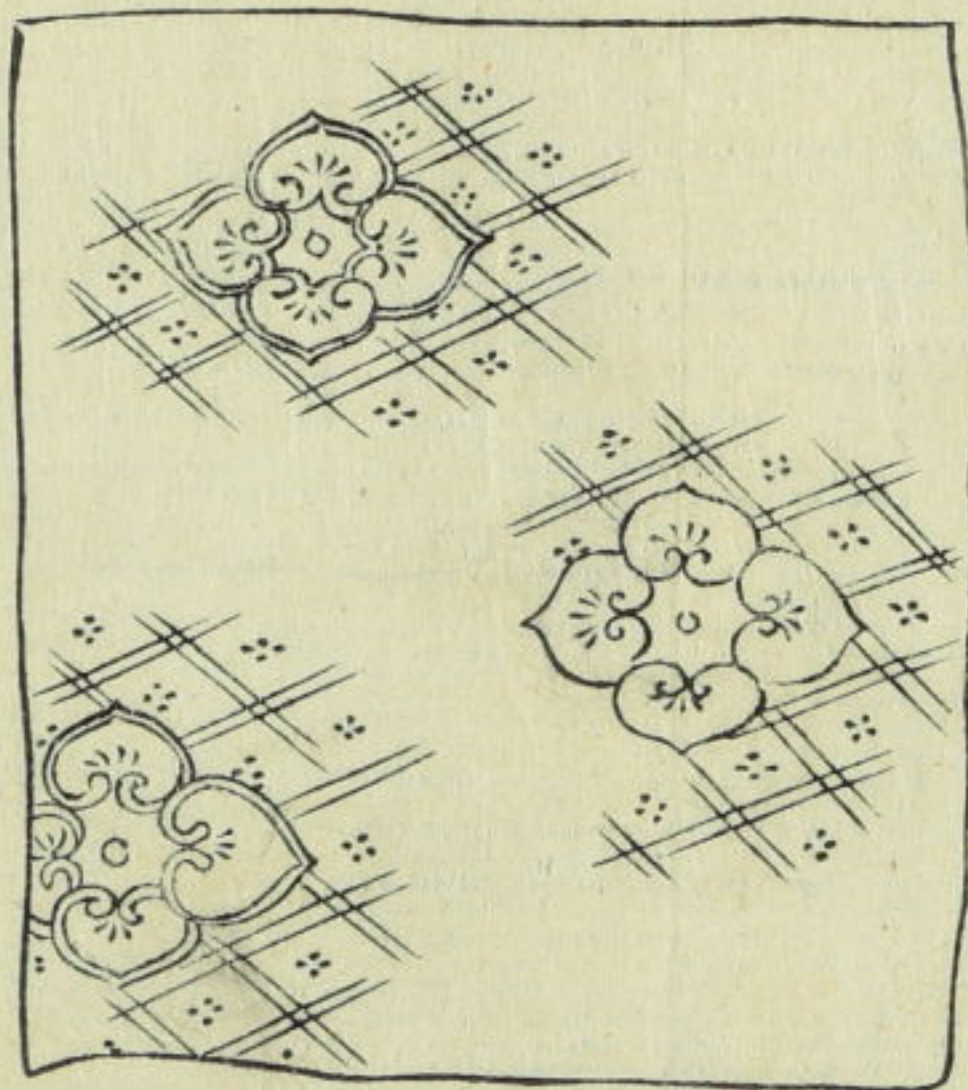
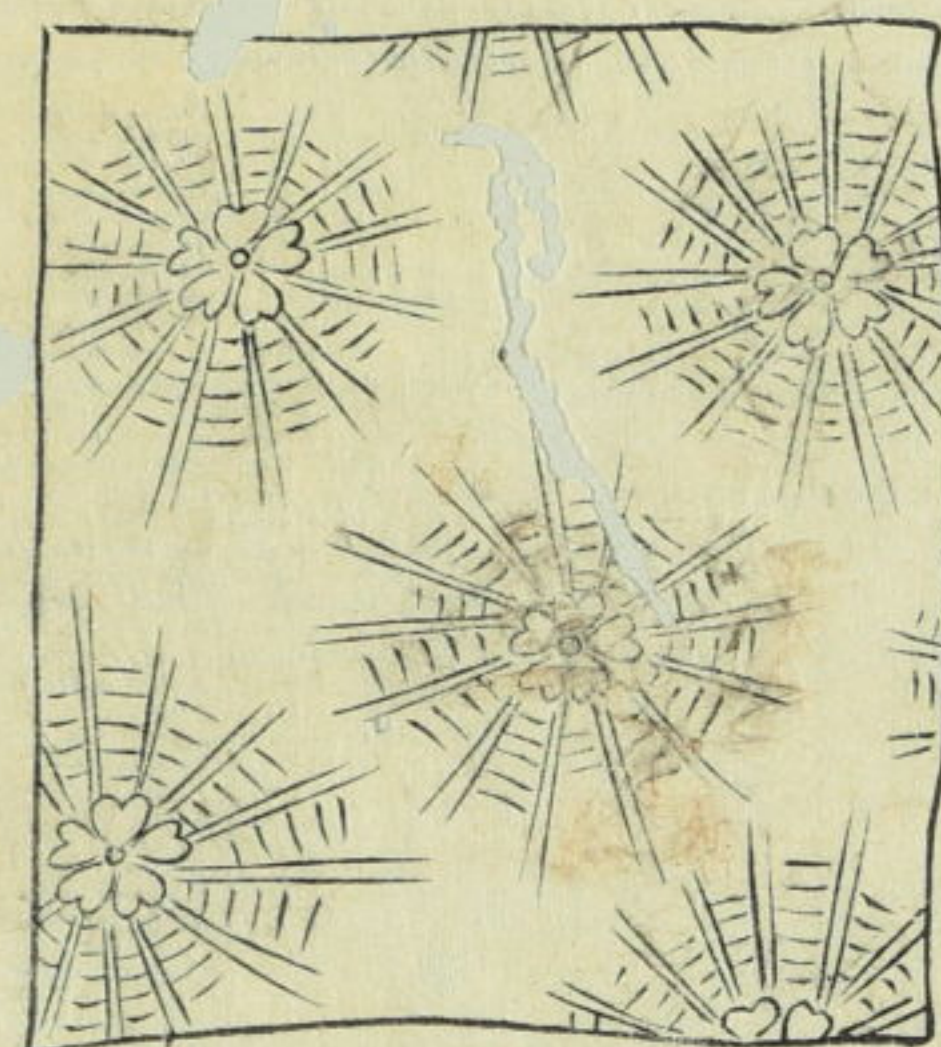
卷之五



是公初乃地紋三十六頁

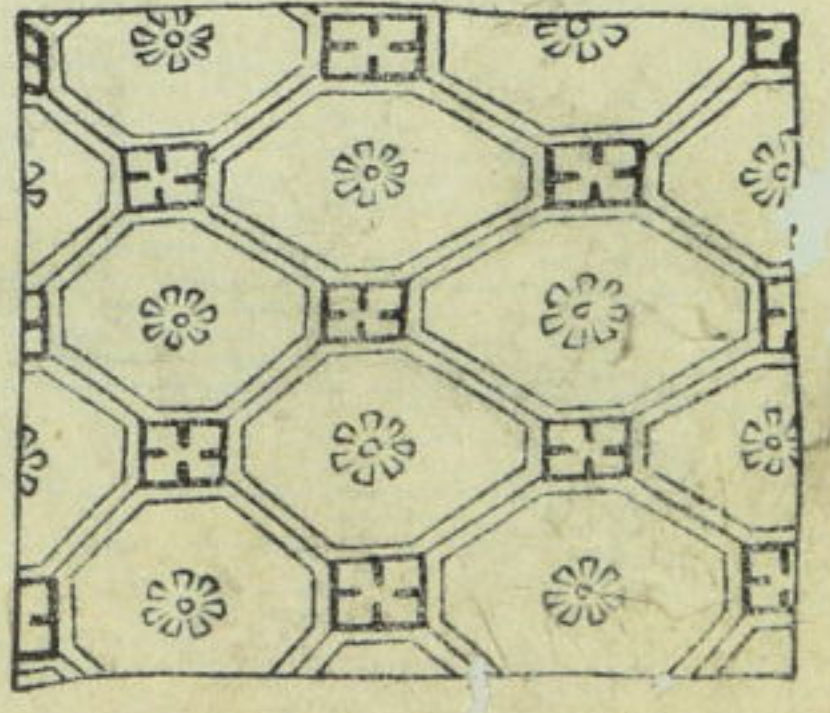
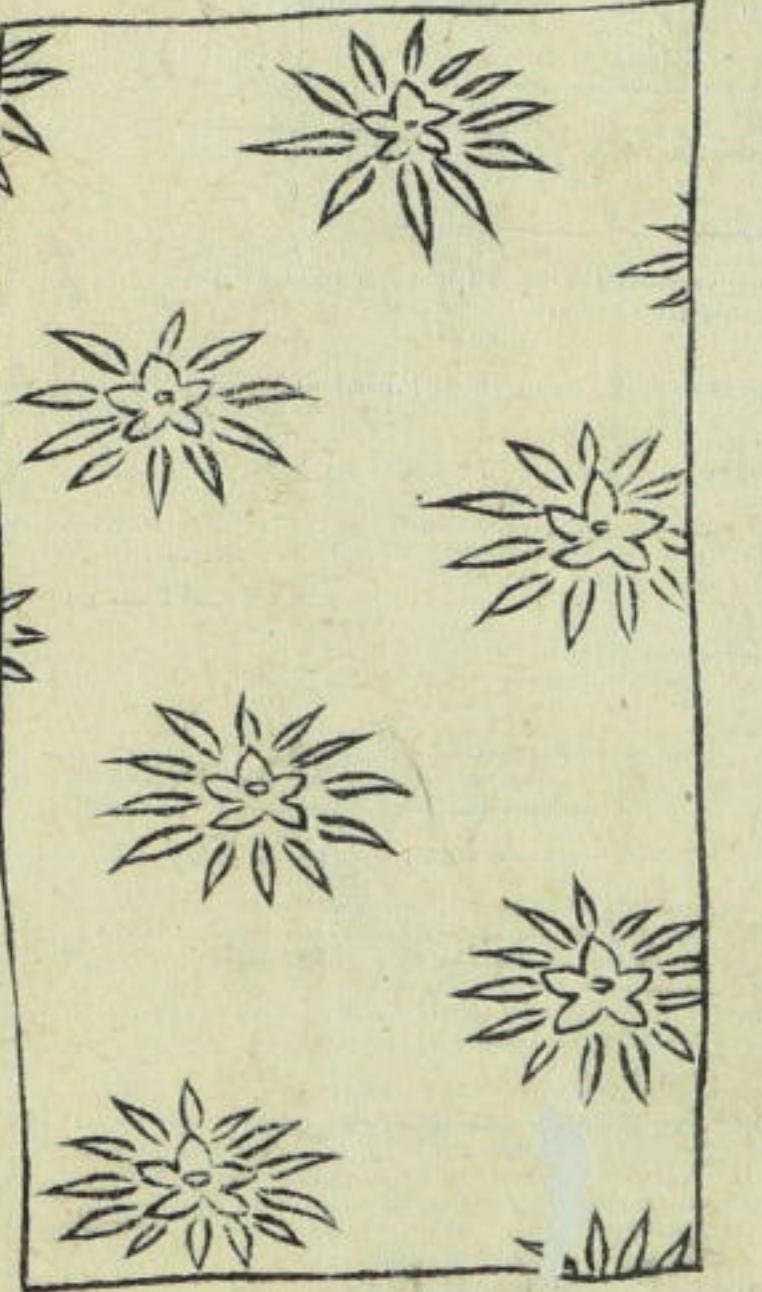
卷之五





書
畫
卷
五
第
五
十
五
頁

書工
繪
卷五



和漢地紋畫終

畫家新舊真偽雜記

○凡古画を訂るに才一乃公のあり先己がらん紙よく脩毫
 松沈をて利と貪と奸を射れんと甜魚一儻微も奸
 利は公と挾じとれい夫偽の境に到りて必執疑と生ト
 真眼は塞して多し或い其謝礼小迷ひ或い其考れやみ
 がた小よめく偽とも夫小定を又い小真なりとあり
 ごと假畫られべ賈物として己が得ん事を欲と是故
 夫偽を究るれば眼くくして終小の賞鑑の家の名成
 得る事なり

○宋元米元章が云る地下の益を見んくは又酒席益送

書工
繪
卷五

小益以看よりみれと是四を視の法也又高瀨子清賞
 族失傳の端よ云く俗人不知看法便手と托畫背起
 就眼看縮素迄く折魚口れく裂て再び補画
 たり綴ひ貼綴とるも何の益有んといふ

○

雨雪風煙雲霧黃昏暈天よ益を見ざるは精神
 現もど紙墨其容質分明をば殊よ佳畫に湿り令梅
 雨乃頃微白を生じて縮画傷ふといふべし

○

夫畫以看せりば先早晨小匣を披き扇とて發
 面に掛初陽はたや遠近視之筆法設色小益
 なるを當て裱褙飾を見るよりなれ裱褙乃錦繡

心法奪れく眞原と誤る事多し贗益必だ裱褙と装
 て俗眸をくはる是才一つを用ひる事先和漢と
 分之後縮帛と考へ次よ筆鋒次り時代次り墨色
 次小精神と觀画一印と不見して卷收之後亭半に
 再び披き熟覽とべし此時裏志と印章と筆合ふ
 當否とん中に要びべし

○

畫圖倭漢乃相違ある事迷るに不及知れも性音周
 文宗丹啟書祝の車專淨画を學びににより未煉
 乃人に見る亦迷ひあり却て淨畫は美草た小
 墨設色甚厚し又落墨とさくとして色を燃どく

草紙一種の密紙化とあり是と云ふ其紙と云ふは厚
重なりと係り蓮より紙を以て倭漢乃間と云
ふ

○唐朝紙縮り薄く厚く搗熟とあり廣き物の四尺餘あり
宋朝の縮り細く軽く光彩有りて紙乃云々 摺磨と
云はれり 廣きもの六尺あり名付て獨拔紙といふ
又元朝の縮り細密ありと稱す小似り和の縮り紙
緯細く多い山城に製也中比探幽子織敷ふ令じて
別一種に縮り作り其製法は務より世ふる是と探出
縮ると云紙の唐の硬き短き廣毛造宋に浚公堂白繭

鵝白藤白或元の清江帝觀音紙明に連七奏
本號を上と和益少と雪舟紙と云あり乃檀帝
あり由と云はれ乃皮を以て濂陰奥式に紙列より
出ると云今いふ一山田道安と云人高野山下に河根と
云取少と四乃為小紙と濂と云り是と道安帝と云
乃楮紙少と今薄帳と用ちる紙に相似り古扇紙の
雲母漢と唐扇紙小似るを古法眼の時代帝と云
米元章に神妙能の三不紙別らる濂高天竺人題
○物紙の三科を演じると其婦一也神不の天竺成
妙なる人題と云るは一紙不の物類と云ふ莫樹と云巧

て天成氣韻の成天趣を先師の規矩を失ふこと
而敢て離て長意旨を得る人趣ありや形の能
物ふ似るるに私專ととるて物趣このつと

○今俗間小益此筆法を得るを以て本修のつと
本末にそ少く唐土を以て例あり米甫文乃末益を
以て市街の壁に貼り賣之云々も本四に對して
末益といふなり末四も物趣あり物ふ似るる半私專
とん取はるる

○畫を看ぶ筆法の形似傳深此外に神氣の有無は考
益一古人の說に三回六朝乃益と万世の法とを益と

あり然れども曹弗與衛協より以降顧陸張吳等此
益の世に有事稀なり況や文字の千三百年益の
子年ありや消滅する物也然るに宋より此道隆ふ
與て規矩を究る者多し故小時代を考へて考
六朝以前は論ぜど先唐宋元明と考益一和
益の上古中世近世當時と分る故小宋は趙希
鵠之なる半ありなり吳子の近世の人されども考
益に益端あり唯尚せ人の目益者不て益
やとべしとる

○時代を考ふに安んは益一其中に就く益と云ふ

別事 專要なり世に益工ふ其一回の風儀わ
 の事有り或は其時にあはく一人名は侍者わ
 其風様と不學して自然とわうける一玉おのり
 和漢は小同し雲は深し龍眠の人物李忠訓は林泉
 戴嵩乃半韓大尉の虎徽宗帝乃鷹牧溪は観音
 舜拳の草花郭熙の魚東坡は竹鳥然暉は遠山
 易之吉が歎 辛翁の布袋惠宗は芦雁雪佃の達
 磨劉宗古は猫大明雪窓は芝蘭陳清波は鐘
 馮汝一子は松邊景照の小鳥楊補之は梅韓幹は
 馬檀芝瑞は叢篠周士安は野景僧日観は蒲萄

丁野堂は菊王若水の花鳥明遠は樓閣李安忠は歎
 虫用田栗嵐は蕭乃龍玉佃は羅漢長淳は休は煙
 村趙子昂は馬張放汝は牛典可乃竹此等の寄
 枚挙をわり違わは其時の人乃越え自然とおわ
 るり和小技も是に因り然るも澤のぞく其一様と
 ああて名あり事なり 漢は射しつゝ
 ○上右小北殿司の風和様に光信風鳥羽僧正風澤様
 小元信風次に同門をのぞも永徳風は山樂風次
 に探出風或は常任風雪舟家も風意代にや遣
 雲谷家小等典は来れ風ををり系師はな松中

書方 卷之九

年明兆の風を養ふなりおふ其風今も遠きり其後
 玉間の風紙写し世より終つて今も其に此意
 味又京師より造り東武の物と古風の様より
 古右京に比より高然暉が遠山は風の今も
 あり元是等と分く亦先師の家風を以て別
 ○古畫の落墨設色を以て絹素より入る懸水の滲
 映して京花の類の紅の胡日おとく緑の碧瑤に
 粉の別膩滑く玉にぞとく果てんとて漆の如
 氷色は多半の消して淡くもり又偽りの香猪
 素れよよ浮後色の偽者力を極く是と成る法

の相似とありといふも只紅をねらぬ
 ○紙絹の舊を古とて今も新を今とて古とて
 三ふわり香煙電の煤小舊びらる其色黒赤紙
 光のりる墨をあげて幅の文と出ると山中
 障嵐乃陰氣に當ておびらる籠りして色
 おとく墨透徹て絹帟小墨と懸して簾
 亦倉庫中或の匣篋乃中小貯て回びらる
 魚の為小紙飲せられ新色おとく帟絹弱
 よく補筆の色は具と現を是等自
 偽りの屋梁に煤を養つて樂あり絹帟

別紙に一旦又糊削りたるものに紙を裏まて
表へ舊く裏打ち新なる物に下れ遠方其甚美
多之より印を押し後煤けをぬき深き印の
より油氣にく煤をぬき又給の具朱紙にて
紙を厚果或は天井乃間よあつて煙煤をぬき
舊紙をぬき地小漣ひ朱をぬき墨汁をぬき
漆をば紙の具朱に自散州類様ありて迷り
堪ど是等分明ありては君にたれ

○畫は五品あり一曰自然筆二曰擬他筆三曰代筆
四曰贗筆五曰正筆より自託筆といひ山水は

人物をも自己に意馳より出て他人の筆に
己が不見を写しおろろと云擬他筆を專ら
或は他人の面白きよりて筆をとり代筆を
その傳教弘法或は筆法を子管丞相等筆に
又之あり吳江の元瑜と云人の宋朝乃名益なりしが
晚年四法求者多にり他の益を或は門人に
あまに己の印を押し其責を塞和傳其例を
さうに唐筆と云い上小云は世物なり正筆といふ
正真ありされい自託筆と正筆といふふ
筆はるし他の筆をふりて写したるもせよ

此題意より写るものありては、後乃收礫、拘ど疑はく
其人の筆に定ると正筆と、擬他筆と、贋筆と
一つふらぬ、筆の擬他筆の名、益或他人の可り
き、紙向をとりて写し、多る斗之、贋筆のよは、云々
紙を古似せ、印章をよせ、其益主人のあは、云々
自他筆の擬他筆に對して、云正筆の贋筆に對
して、各別の筆なり

○最亦、其の洋益の偽筆あり、徽宗楊補之、或は殘
舜、筆趙子昂、呂記等、多の、贋筆を、か、絹素、或は
墨、款、瀆、語、中文、と、に、皆、得、あり、全、偽、の、風、氣、は、し

依く功者の月少、是、誤、事、多、時代乃相違り
ある、益々、後、一、新、和、の、物、を、以、て、偽、人、も、別、傳、あり
故り、吟、味、未、だ、し、これ、を、鑒、が、し、補、之、が、梅、東、坡、が
竹、子、昂、の、馬、骨、に、ま、る、徒、公、付、益、し、而、て、風、神
氣、韵、を、以、て、の、偽、人、乃、偽、筆、なる、と、知、べし

○益を視究と古摺といふも、容易あり、其の決意
し、が、了、た、物、の、幾、回、も、ん、る、に、ま、り、な、り、體、音、唐、は、圖、立
本、と、云、る、由、者、あり、其、比、よ、あ、り、て、い、筆、を、さ、る、人、か、り
しが、或、時、江、陵、と、云、ふ、に、て、張、僧、繇、が、畫、し、寺、院、の
壁、を、ん、て、さ、る、の、益、と、云、ふ、一、紙、も、唐、文、を、た、し、其、の

ありとわすれし其後やとて筆は彼筆と云ふに筆は
 妙筆とくえんて如く兼ふる事とて筆は
 近代の名手なりと思ふと相つてはらく思は
 ざるに筆妙は後で面白半限をこころとて筆は
 して又三度筆て着てあきびとの趣く画く神あり
 ごとく云ふなく物も風韻妙ありと云ふは世に於
 寝食とてとれ其筆下は坐し是は感ぜず筆數
 日なりと云ふ假神は視て面白そのの却て筆はわ
 ど名手なり筆の一且よの着ては此所をよく推
 量観念し

○師傳は曰く蓋に八法といふとあり一は活筆二は活劑三
 は活硯四は活水五は活筆六は活手七は活神八は活
 墨九は一の活筆といふ中ハ數刻筆なる筆は運
 筆とよしとて又却てとるとなり是を嬌ハ新なる筆
 乃秃ざる其毛有を活筆と云ふ活劑ハ絹紙と云ふに
 新なると云ふ陳ハ熱水のあつた弱して筆をさするを
 嬌と云ふ活硯ハ研と云ふ硯は墨を失ふと云ふ
 活の條で用ひたし活の妙は活と云ふ且活は活
 筆に用ひたすは活と云ふ活は活と云ふ活は活と云ふ
 生と時と際と新と活と活と用ひたすは活筆の用ひたす

臨て終一研を云葉て研至あるの益光と出るとは
 安閑無事より始て手紙用ゆると云自書を研或の
 自水と汲熱て力と身ひ骨より本多れ腕凝結して
 固旋よけさう是と嬌ふ活神の神を静めてさひと
 ちゆ泰然として氣をさぐべし微七の体は地眼外
 の物と清う時の字力ゆゆりの氣類わるとはし活
 畧の晴天也清朗なると云曇雲と出るとは活
 然とせし必と息ととてなるとのなり純毫と活と
 云此とひて之をさへは修筆のみの八法都てわけある
 也一修筆の修筆の古人の粉筆とたよと並て又合

写とをて除筆と云或の筆紙より重て透写とをて騰
 馮と云似如筆勢似たりとも墨と色と必とさるる也
 之より己が圖ふあふれが越意なり筆真筆紙
 漫んや
 ○古益の絹帛は地完整ゆして破砕なく清白なる事
 新なるごとく上糸に糸面完整なれども貼襪とら
 多育と申ふとと又破砕して零落片くるとは遠て
 新なる絹を以て綴補ひらると下糸とと
 ○上品の完整なる中糸も下糸は次あり山水とひて又
 上品と人人物小なるとひて是と次とを花鳥是にけと

獸是ノ次ハ價ハ毛ハ以テ準ト知ル

○宋人の繡畫山水花鳥人物樓臺等針線細密に

して針目と布との間に僅に細糸一二筋を以て縫針を

髪ノ毛ハ詰リ精妙ナること云々

奪ハ毫ハ小ハ筆ハ以テ畫ス遠クり宋朝の繡花鳥人物

乃眉目も繡縫と云ふ元朝の繡花鳥人物

い眉目も繡縫と云ふ元朝の繡花鳥人物

ど是ハ以テ宋ノ元ノ絨繡をりまハ知ル

○洋画は印有て名なれり御府に畫之る四り

下等ノの是ハ知ル赤ハ此ハ跡ハ二ハ三ハの是ハ画ハ有ル下

かりちりハ有ル后ハ世賞ハ人ハ乃ハ下ハ文ハ之ハ或ハ畫ハ端ハに

半ハ有ル下ハ符ハ下ハ又ハ日ハに陰文陽文有ル得ルて

古ハ款識ハと云フ博古圖ハいテ古ハ意ハ款識ハあり款ハ

陰文ハ凹ハ入ハと云フ者ハ云フ識ハ陽文ハ凸ハ出ハと云フもの云フ

然レ款識ハ印ハの體ハと云フ絹紙ハ小ハ押ハと云フ紙ハの陽

文陰文ハあり款ハの文字ハ白ハく比ハ兼ハ之ハ識ハの文字ハ兼ハ地ハ白

かり得ルよハ多クの款ハ下ハと云フ押ハあり陰陽ハ此ハ法ハよハ

あり

○邵菴竹素房印色方 出文房清事

- 一 鬱金 二分
- 一 白芨 一分
- 一 白蘇 一分
- 一 桐麻油 一

一銀硃 一兩 一艾葉 二錢

先油をよく煮て蒸すの三味と入るるに出る付くは
朱と入少く白礬液加へ艾とよく煮て灰汁を去り上
練絹の包く用也又鷲鳥の羽を煮し碎搗爛し艾
乃代小用ゆも佳きなり

○唐製朱印色乃方

一白麻油 二錢 一草麻仁 一錢 一皂角 五分 一明礬 五分
一白芨 二分 一陳黃 五分 一花椒 四粒 一白蠟 五分
一辰砂 三兩 一紅粉 二錢

將油於鉢内數滾下皂椒熬至焦色候去渣

再熬して酒水成玉下端礬等物扱之冷埋在内

三日して取出て辰砂と下乳鉢の内小於て細く研す
子餘適艾を又液加へ拌勻以爲度

本牧溪翁の方也季史長史乃傳ゆして世に弘く製也
雪舟及雪村揚月等相次ぐ沙門小多の州方を用之

○高瀨子の印色方

一麻油 一斤 一牙皂 三箇 一草麻仁 半目 一花椒 四粒
一藤芩 一錢 一明礬 五分 一黃柏 五分 一黃蠟 五分
一胡椒 五粒 一辰砂 二分 一臘膩 二分 一水花漆 四粒
本件を先麻油液以て蒸すと同熬して數滾し丹皂

角花椒と入く熱して水に滴して珠を成ふ。此の方に
煖礬を多し入て起し之を去。蓬艾を用ひ骨う
て三朱を加へ搗て紅成を度とす。

○倭製朱印色の方

- 一胡麻油 百目 一生姜 四
- 一唐堊 三
- 一艾 十
- 一草麻仁 十粒 一朱 百目

右胡麻油は唐堊草麻仁を入れて生姜と入せんと生姜
乃細くふるふとてあげ砂上に冷して火氣を去り艾を
入て研中に煉右の油の扱を此の量どなる油式抄目
朱と百目入金箔を三枚紅粉十錢入て合とす。

○朱印色の方と知と賞鑿此一つあり偽印の朱も自
と其色偽らざりて或の鮮は過奇の妍は是れ中
けり。此のひを以て成故り。此のど。

右は云ぶく真偽の辨和と時代と方角と紙絹と新
舊と。筆毫と筆鋒と印文と朱色と貼觀と。此十様
印案合て窺看にわづらひしとす。

○俗は曰古筆古画を似と偽り堪能の人ありて甚耐
代り希と以て殊に書よて書画をよとせし。正筆代し
と云是も俗人の言ゆて強て毎どるにゆらば。此
ごと世筆とくも是紙信とふれ。今是と辨と紙紙の

子孫までに及ぶ事痛まらば非や其心かなん
 事ふよりて身の為の鬻とを以て始て偽物
 露もあふ塵一世間も此類も多し只具眼は
 心よくあふ一袋回も賞鑑あふとて訂
 者も利欲を離賞鑑其名を求塵一

